総合政策　第7巻第1号（2005）pp. 31－64
Journal of Policy Studies

山田町とザイスト市との友好都市交流に関する調査研究

佐藤　智子*

要　　旨　今から362年前の1643年6月10日、そして再度の7月28日、鎖国時代の日本であったが、1隻のオランダ船ブレスケンス号が、水と食料を求めて山田湾に姿を現した。記録によると、異国船の入港に地元の人々は驚愕を隠せなかったが、乗組員を温かくもてなした。この史実をもとに山田町は、1960年代にブレスケンス号の母港であるオーストブルフ市へ姉妹都市締結の打診をしたが、実現には至らなかった。その後オランダ王室私設顧問からクリステリック・カレッジ・ザイスト校を紹介され、1996年国際理解教育を目的にして同校へ最初の中学生を派遣した。ザイスト市表敬訪問も含むこのプログラムは継続して実施され、両市町の絆が強固になっていった。そして日蘭交流400周年記念の2000年に、山田町はザイスト市と念願の友好都市締結を果たした。提携から今年で5年が経過したことになるが、継続性をみている青少年派遣事業に焦点を当てて交流の内容を検証した。また何故1960年代に山田町が望んだ姉妹都市締結が実現しなかったのか、日蘭関係の歴史を紐解きながら考察した。

キーワード　山田町、ザイスト市、友好都市関係、ブレスケンス号、オランダ島、青少年交流、旧蘭領東インド

I　はじめに

山田町は岩手県の沿岸部に位置し太平洋に面しているが、海に面している町に共通して言えることのひとつは、座礁した船や、水や食料を求める船などが入港し、国内外を問わず外との接触があることである。太平洋に面している千葉県御宿町も、17世紀初頭座礁した船の乗組員に地元の人々が親切を施した縁で、メキシコのアカプルコ市と1978年8月7日姉妹都市提携を結んだ。山田町がオランダ（オランダ王国はヨーロッパに位置するオランダ本土とカリブ海の蘭領アンティル諸島及び同アルバ島から成り立っているが、本論文で「オランダ」と表記する時には、オランダ本土のみを指す）と関係を持つようになったのもまた、17世紀中葉の外国船との遭遇による。

2000年は日蘭交流400周年の記念の年であり、約700の関連行事が開催されたが、5月下旬の天皇皇后両陛下のオランダ訪問をハイライトとして、日本とオランダの相互理解が深まり友好関係がさらに発展したことはまだ記憶に新しいところである。岩手県の山田町もこの機会を捕らえ、オランダの都市と大願の友好都市提携を成就させた。相手はオランダのユトレヒト州ザイスト（Zeist）市である。岩手県の自治体の姉妹都市締結は1990年代の前半が最も多いが[1)]、山田町は、2002年の金ヶ崎町とドイツのライネフェルデ市との姉妹都市締結についで新しい。なお、2005年1月1日現在オランダの市町村と姉妹都市提携を結んでいる日本の自治体の数は、山田町を含めて12である[2)]。（都道府県レベルでは皆無である。）2004年4月1日現在提携先の上位を見てみるとアメリカ合衆国441件、中国301件、大韓民国106件、オースト

*　岩手県立大学総合政策学部　〒020－0193　岩手県滝沢村滝沢字巣子152－52

ラリア105件であり、これと比較すると極端に少ない数である。

面積が41,864km²と九州地方（44,417km²）よりも小さな国であるオランダと日本の関係は、長崎の出島に象徴されるように、大変長く、またある時期においては大変親密であった。山田町とザイスト市との関係を研究するには、17世紀まで遡及しなければならないので、最初に日本とオランダとの関係史を簡略に叙述する。それを土台にして、山田町がどのようにしてザイスト市と友好都市関係を結ぶようになったのかを明らかにし、最後に青少年派遣事業に焦点を当てて、この5年間の取り組みを検証する。

Ⅱ　日蘭交流の歴史

1．鎖国時代の日本とオランダの関係

山田町とザイスト市との友好都市関係を理解するためには、最初にその背景となる日本とオランダとの関係を理解しなければならない。

1581年ネーデルランド連邦共和国として独立を宣言したオランダは、胡椒に代表される香辛料などを求めて、また金銀を求めて東洋に商船を送り出すようになった。1598年6月ロッテルダム株式会社が派遣した5隻[3]の艦隊が、ロッテルダムからアジアに向けて出帆した。しかし、太平洋上で提督の死に遭遇するなど航海は困難を極め、リーフデ号1隻だけが約2年後の1600年4月29日大分県の豊後（臼杵湾）にたどり着いた。110名の乗組員のうち、生きて日本に漂着したのはたった24名[4]であった。1606年徳川家康がリーフデ号の乗組員に日本渡航許可の朱印状を与え、1609年2隻の船が日本に来航し、日本とオランダの正式な国交が始まった。オランダは平戸に商館を開設し、貿易を盛んに進めていったが、1637年に起こった島原の乱を契機として、1639年幕府がポルトガル人を追放したため（鎖国の完成）、オランダ人は1641年彼らが退去した長崎の出島へ移転を強制された。

鎖国時代と呼ばれる時代は200年以上続いたが、司馬遼太郎は『オランダ紀行』に「鎖国された日本社会を一個の暗箱とすれば、針で突いたような穴がいわば長崎であり、外光がかすかに射しこんでいて、それがオランダだった[5]」と記している。しかし、近年の研究によると幕府は自分の殻の中に狷介に閉じこもっていたわけではなく、実際は長崎の他に対馬、薩摩、松前が外に対して開かれていた[6]。とは言うものの、日本においてオランダは西洋国として揺るぎない地位を確立し、通商のみならず医学や科学などいわゆる蘭学と総称される分野においても、大きな影響を及ぼしたことはまちがいない事実である。特に日本人に馴染み深いのは、杉田玄白と中川淳庵が訳した『解体新書』であり、1774年オランダ語の解剖書の翻訳が公刊されるにおよび、本格的な蘭学が開始された。ドイツ生まれであるが、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold　1796－1866）も蘭学の一翼を担った。1823年出島のオランダ商館の医師として赴任した彼は、長崎郊外に鳴滝塾を開設した。医学、薬学、植物学、生物学など広範な学問を修めたフォン・シーボルトのもとに、高野長英、湊長安、美馬順三など多くの優秀な門下生が集まった[7]。

2．開国後の日本とオランダの関係

1853年ペリーの黒船が来航し、日本は鎖国を解き、近代国家を目指すことになった。1859年の開国後これまでオランダが独占していた指導的な地位は、イギリスやアメリカに奪われることになるが、オランダは医学、造船、海運、土木などの分野で日本の近代化に大きく貢献した。長崎大学には同窓会館であるポンペ会館や、ポンペの胸像が彫られたポンペ顕彰記念銘板などポンペに関係するものが散見される。J・L・C・ポンペ・ファン・メーデルフォル（J.L.C. Pompe van Meerdervoort　1829－1908）は第2次海軍伝習隊付医師で、長崎大学医学部の創始者である。ポンペは1857年9月21日、幕府がオランダに注文した

咸臨丸[8]（ヤパン号）で日本にやって来た。ユトレヒト陸軍医学校で医学を修めたポンペは、長崎で日本人に医学に関する基礎科目を教えたほかに、人体解剖実習を導入し、さらに西洋式病院療養所（1865年に精得館と改称）で臨床教育を施し、系統的な医学教育を確立した。日本においてここから合理的な近代医学教育が始まった。5年間の滞在の後1862年にポンペは長崎を離れるが、幕府派遣のオランダ留学生榎本武揚、西周、赤松則良などが同行した。

医学のみならず治水の面においても、オランダは最先端の知識と高度な技術を持っていた。ライン川、マース川、スヘルデ川の下流に位置し、現在でも国土の約24%が海抜以下にあるオランダは、古くから水との闘いを強いられ、治水技術を発達させてきた。猪苗代湖畔にC・J・ファン・ドールン（C.J. van Doorn 1837－1906）の銅像が建っているが、彼は猪苗代湖から安積平野に水を導く安積疎水開削事業を指揮した[9]。1872年から1880年の8年間、ドールンは明治政府のお雇い外国人として、日本の河川及び水利事業、ひいては国土開発にはかり知れない貢献をした。ヨハネス・デ・レーケ（Johannes de Rijke 1842－1913）もまた1873年から1903年まで30年間の長きに渡り日本に滞在し、木曾川改修などに尽力した。彼の功績は、愛知県立田村に建つ「治水の恩人」と刻まれた銅像によって称えられている。

3．オランダのインドネシア植民地化と日本のインドネシア占領

インドネシアの歴史はオランダの歴史、そしてまた日本の歴史と複雑に絡み合っているので、インドネシア（旧蘭領東インド）が独立を勝ち取るまでの流れを概観する。人口約2億1,500万人を擁し、17,000余の島からなる東南アジアの大国であるインドネシアの歴史は、紀元前2000年頃まで遡る。この頃からマレー系の民族が中国やベトナムから移り住むようになり、紀元前1世紀頃からはインドの貿易商が大勢この地に定住し始めた。それ以降13世紀まで様々な王国が興亡を繰り返していったが、14世紀から15世紀にかけてジャワやスマトラなど各地にイスラム教を信奉する王国が誕生した。

16世紀になると大航海時代が到来し、ヨーロッパ諸国が香辛料を求めてこの地域に姿を現すようになり、1511年ポルトガルが最初にインドネシアを支配した。オランダは1602年にジャワ島にオランダ東インド会社を設立し、1619年ジャカルタ（旧バタビア）を攻撃した。その後、350年にわたり植民地政策をインドネシアの領域全土に推し進めていった。1811年から1816年まで一時期イギリスがジャワ島を占領したが、20世紀初頭までにはポルトガル領チモールを除き東インド諸島はすべてオランダの支配権が及ぶところとなり、プランテーション経営による経済的搾取が強化された。しかし、1942年日本軍の侵略により、オランダのインドネシア支配に終止符が打たれた。1928年にスカルノ（Achamet Soekarno 1901－1970）がインドネシア国民党を結成し、すでに独立運動を指導していたが、1945年日本が降服した後に戻ってきたオランダ軍と独立戦争を戦った。1949年12月オランダのハーグでの会議で独立が合意され、1950年8月完全独立が達成された。独立運動の英雄スカルノが初代大統領に就任した。

4．第2次世界大戦における日本のオランダに対する賠償問題

上述のインドネシアの歴史で少し触れたように、第2次世界大戦の最中、1942年に日本軍はオランダ領インドネシアへ侵攻し、多くのオランダ人を抑留し、収容所での生活を強いた。終戦までに民間人の捕虜約9万人のうち約1万2千人、そして軍人の捕虜約4万人のうち約1万人が死亡したとされる。日本とオランダの戦後処理は、1951年のサンフランシスコ平和条約と1956年の日蘭議定書により、法的に解決済みとされた。前者の内容は、サンフランシスコ平和条約第14条により、オランダは「日本は賠償を支払うべきであるが、日本の存立可能な経済を維持するとの観点からすべての賠償請求権及び財産、並びに、戦争によって生じた国及び国民の請求権を放棄した[10]」とするものである。一方後者は、日本はオランダ国民に与えた苦痛に対する同情と遺憾の意を表明するために、国際赤十字委員会を通じて1千万ドルを見舞金として、オランダに自発的に提供したとするものである。しかし、反日感情は収まらず、1972年昭和天

皇がオランダを訪問した際に車列に卵が投げつけられ、さらに1991年海部総理大臣が記念碑に献じた花が投げ捨てられた。また1986年には世論の反発を考慮して、ユリアナ女王が訪日を取りやめるまでに国民の感情は激昂した。1991年に訪日を果たしたベアトリスク女王は、宮中晩餐会の席上、「お国ではあまり知られていない歴史の一章です[11)]」と、日本との歴史問題に言及した。

心身に癒しがたい傷をかかえた被害者や遺族の団体は、1990年に日本政府に対して法的責任を求め、対日道義的債務基金を結成した。団体は一人当たり2万2千ドルの補償を求め、1994年1月東京地方裁判所に提訴した。しかし、1998年11月請求が棄却され、東京高等裁判所に控訴し、さらに2001年10月最高裁判所へ上告した。この間1994年12月以来、約100名の人々が月に一度ハーグにある日本国大使館前で、戦争中の写真やプラカードなどを掲げデモを行った[12)]。日本側は彼らとの理解を図るための方策のひとつとして、現在の日本を知ってもらうために、5年間で対日道義的債務基金の関係者100名を日本に招待することを提案した。1996年9月22名の第1陣が、平和友好交流・日蘭架け橋計画の一環として日本を訪問した。政府関係者との話合いのほか、一行はオランダと関わりのある郡山市や長崎市などを訪れ、大歓迎で迎えられた。参加者の一人は、「日本への恨みは融けた[13)]」と話した。また、日本側は村山富市政権下の1995年、おわびと反省の気持ちを具体的に表明するための実施母体として「女性のためのアジア平和国民基金[14)]」（アジア女性基金）を創設した。これを受けてオランダ側にも、1998年にオランダ事業実施委員会が設立され、2001年までの3年間に79名の元従軍慰安婦に、医療福祉面での財政的な支援が行われた。

Ⅲ　山田町とオランダとの邂逅――ブレスケンス号山田湾に入港

マルコ・ポーロ（Marco Polo　1254－1324）の『東方見聞録』以来ヨーロッパの国々は東方への関心を深め、先陣を切ってスペインが1611年、金銀が埋蔵されているとされる諸島の探索を開始した。オランダもこれに続いて、1602年に設立されたオランダ東インド会社が、金銀諸島探検の目的で、1643年2月3日ジャワ島のバタビア港から2隻の船を送り出した。しかしながら、東インド会社総督コルネイリス・ファン・デル・レインの期待を一身に背負い、総勢116名が乗り込んだ2隻の船、カムトリクム号（船名は北オランダ州の町名に由来する）とブレスケンス号[15)]（船名はゼーランド州の地名に由来する）は、3カ月半後の5月19日八丈島の手前で暴風雨の襲撃をうけ、お互いを見失ってしまう。

その後60名の乗組員を乗せたブレスケンス号（全長33m、幅7.6m）は、5月29日に日本沿岸にたどり着き、6月10日山田浦（現在の大浦）に姿を現す。ユトレヒト生まれのヘンドリック・コルネイリス・スハープ船長に率いられた乗組員の数名が、いくつかの樽に水を補給するために、武装して小舟で岸に向かった。まもなく地元の人々は外国人に気づくことになる。これが山田村の住民とオランダ人との初めての邂逅であるが、鎖国令（1635年海外渡航禁止令、1639年ポルトガル船来航禁止令が相次いで発布された）が敷かれていた日本で、突然に現れた外国人に村民はどのように対応したのであろうか。

……人々は船を調べるために乗船し、酒と釣ったばかりの魚を交換し、全く奇跡のようにどこからともなく現れた外国人たちと共に酒を飲んだ。祝杯をあげるべき実に珍しい事件だった。この話は、大浦から湾の周辺へと伝わった。山田、飯岡、大沢、織笠、船越、それに船越半島の裏側にある田の浜や小谷鳥などの遠方からも、男、女、子供までが、小舟でこの大船を見にやって来た。

船を見にきた人々の中には、煙管や山鉈のようなものを外国人と交換するために持参した者もいた。山田にある熊野大権現神社の宮司佐藤家の記録「佐藤家文書」には、「一体どれほどの〔人々が品物を〕交換したのかは判らない」と記されている[16)]。

酒や食事が振舞われ音楽が奏でられるなか、住民の歓待を受け、「極めて結構な一時を過ごしたに相違ない[17)]」乗組員は、次の朝探検を続行するために山田湾をあとにした。しかし、北方エトロフ島への航海は徒労に終り、ブレスケンス号は7月28日再度山田湾に入港した[18)]。初入港と異なり再港には予期せぬ事態が待ち受けていた。翌日船長を含む10名の乗組員は、「日本の海域に入った外国船については、すべて報告せよ」という幕府の命令に忠実に従った村民の知らせを受けて駆けつけた南部藩の役人に捕縛されてしまった。一行は盛岡、そして江戸に護送され、そこで4カ月にわたり厳しい取調べを受けた。一行の身柄は、急遽長崎から馳せ参じた出島商館長の手に委ねられ、12月8日釈放された。これでブレスケンス号事件は落着することになる。

Ⅳ　山田町とザイスト市との友好都市締結までの長い道程

1．ブレスケンス号の母港オーストブルフ市へ姉妹都市締結の打診

鎖国時代のために上陸した乗組員の捕縛という結果に終わったが、山田町の住民は1643年オランダ船のブレスケンス号が山田浦に入港した事実を大切にしてきた。その証拠に、その当時の地元の人々の驚愕と船員を歓待した様子を記した文書がいまでも民家に保存されている。そしてなによりも、山田湾に浮かぶ周囲2㎞の無人島でタブの木が密生している大島（26,945㎡）を、町民はオランダ島と呼んで親しんでいる。1964年に山田町観光協会顧問の三浦寅三氏の提言により、議会の承認を受けて、大島はオランダ島と改称されたが、この年あたりからオランダ、特にブレスケンス号の母港であったと推測されるオーストブルフ市との姉妹都市締結の話が持ち上がった。その準備として自治体そして個人のレベルでも関連資料の収集と古文書の精読が始まった。一方山田町は在日オランダ大使館に協力を仰ぐとともに、1975年11月ユネスコ、外務省、オランダ国立観光協会などを通して、オーストブルフ市に姉妹都市締結を申し入れた。半年後の1976年5月オーストブルフ市長から、提案には原則的に賛成である旨の回答があったが、それ以上の進展を見せることなく、この話は立ち消えとなった。1999年6月18日筆者が山田町の総務課国際交流係で聞き取り調査をした際に、担当者は相手が示した理由を、「極東の町との交流はお金がかかる。加えて、オランダでは反日感情が激しく、日本の都市と姉妹都市の関係を持つことは賢明ではないと判断した」と、説明した。

2．オランダとのつながりの深化

姉妹都市締結という当初の目的を達成することはできなかったが、山田町の史実に執着する姿勢は揺らぐことがなく、1992年4月29日ブレスケンス号事件研究の第一人者であるハワイ大学のレイニアー・H・ヘスリンク（Reinier H. Hesselink）準教授を招いて、「オランダ船山田港入港について」という演題の講演会を催した。これが翌年1993年7月28日から3日間にわたり開催されたブレスケンス号山田港入港350周年記念事業へとつながっていく。「オランダ船大浦着船350周年記念説明版」を大浦地区の入口に、そして「ブレスケンス号着船の地」の標柱を大浦沖の沢に建立するなどして、いよいよ目に見える形でオランダとの心的距離を縮める一方、東京大学名誉教授加藤榮一氏による「ブレスケンス号の南部漂着と日本側の対応」と題した講演会を開催して、ブレスケンス号にまつわる事実の理解を深めていった。大浦地区教育振興運動実践協議会と大浦地区運営委員会によって公刊された「オランダ船入港350周年記念誌」は、大浦地区の全世帯に配られ、活字を通してさらなる理解がはかられた。

この間山田町はオランダ大使館との関係を深め、町長や教育長がクイーンズ・デーに招待されるまでになり、1993年7月25日から8月1日まで中央コミュニティーセンターで開催されたブレスケンス号展には、オランダ大使が共催者として名を連ねている。下記のように、7月29日に友好親書が発せられたが、署名

者は黒澤孝山田町長とローランド・ファン・デン・ベルグ（Roland van den Berg）オランダ大使である。

1643年7月28日（寛永20年6月13日）にオランダ船ブレスケンス号が、日本国・岩手県山田港に入港してから350周年を迎えます。

この事は、日本国において西洋学が発展する契機になるなど、国内外に大きな影響を与えました。

国際社会が進展している本日ここに、その貴重な史実を振り返り記念事業が行われますことは、非常に意義の深いことであります。

今後、お互いに友好を深めながら、世界の平和と国際交流のために努力していくことを表明致します。

3．クリステリック・カレッジ・ザイスト校の紹介

ブレスケンス号入港350周年祭を契機として、山田町に新しい転機が訪れる。1993年7月の記念祭に出席したオランダ王室私設顧問のエリック・ハーゼルホフ・ルールフゼマ（Erik Hazlhoff Roelfzema）氏は、山田町のオランダと交流したいという願いを真摯に受け止めた。そして同年10月には、彼自身がすでに64年の会員歴を持つロイヤル・ハーグ・フットボールクラブを、そして1994年3月には、彼のいとこが校長をしているクリステリック・カレッジ・ザイスト校を山田町に紹介し、山田町のザイスト市との友好都市締結への布陣を構えた。翌年の1995年8月24日から30日まで、ロイヤル・ハーグ・フットボールクラブの少年チームが山田町を訪れ、スポーツを通した交流が開始された。同年10月町長、教育長、町議会議長がザイスト市とクリステリック・カレッジ・ザイスト校に足を運び、中学生派遣使節団の受け入れを要請した。それを受けて、翌年の2月3日から12日まで第1次ジュニア海外使節団派遣事業が実施され、8名の中学生と2名の統導者がクリステリック・カレッジ・ザイスト校を訪問し交流が始まった。この事業はその後も継続されていく。（クリステリック・カレッジ・ザイスト校は1901年創立の市内では第2番目に古い学校である。設立当初の校名は、Christelijk Lyceum Zeist （CLZ）であったが、山田町と交流を持つようになった時には、Christelijk College Zeist（CCZ）と校名が変更になっており、2003年頃に再度当初の名前に戻した。CCZとCLZが混在しているが、同一校である。）なお、中学生だけでなく成人の海外研修派遣事業も開始され、同年3月20日から30日まで11名の一行がオランダで研修を積んだ。

4．芸術や文化の分野におけるオランダとの交流

オランダ大使館の仲介により、山田町では教育のみならず芸術や文化の分野においても交流が盛んになっていった。山田中学校は、2005年2月13日に開催されたアンサンブルコンテスト第32回東北大会で、金賞を受賞するほど質の高い演奏をすることで定評があるが、そういう土壌があるところに、1996年5月19日トン・コープマン氏が率いるアムステルダム・バロック・オーケストラがやって来た。オランダの合唱団の来日が不可能になり、急遽代役として来日中のアムステルダム・バロック・オーケストラに白羽の矢が立った。オルガンとチェンバロ奏者として有名なコープマン氏は、1979年に17世紀から18世紀に用いられた古楽器だけを使用するオーケストラを結成した。5月7日に来日し、東京や大阪など大都市で演奏会を行っていたが、突然オランダ大使館から山田町行きを要請された。5月19日の公演当日、35名の一行は東京からの長旅の疲れも見せず、中央公民館ホールでモーツアルトの作品を演奏し、約700名の聴衆を魅了した。翌日はリハーサル風景を公開し、さらに音楽に触れ、作品解釈を深める機会を町民に与えた。1泊2日という駆け足の滞在だったが、団員は町民の音楽に対する情熱と温かい歓迎を心に刻み町を離れた。「日本旅館に泊まって漁港を臨む雄大な露天風呂にどっぷり、という体験にどうやらノックアウトされた[19]」一行は、2年後に今度は自ら申し出て再来を果たした。このオーケストラは「国際交流フェスティバル'98[20]」の一環として行事に参加したが、バッハ、ヘンデル、モーツァルトの調べを奏で、前

回以上に町民さらには、世界第一級の演奏を聴こうと盛岡市からバスをチャーターして駆けつけた聴衆を感動の渦に巻き込んだ。「バロック音楽を演奏する際、まず作曲者を理解するために、作品を分析することが重要です。バロック音楽は常に聴衆とのコミュニケーションを必要とします[21)]」と語るコープマン氏の音楽は、深い洞察力と精緻な分析に裏打ちされ、聴衆の心に浸透していった。

音楽の他に、美術を通して交流が行われた。オランダ大使館の推薦を受けたアムステルダム生まれの画家シュールド・ベッカー氏が、1996年9月28日から約2カ月間山田町に滞在した。彼はアムステルダム文化基金の助成を得て「奥の細道」シリーズを制作するなど、日本の風景を独自の視点で描き続けている。その作品はオランダをはじめ日本やアメリカでも高く評価され、海外での個展も回を重ねている。ベッカー氏は、「海が美しく山の紅葉が色づき始めた山田は創作意欲のわく所です[22)]」と語り、山田町で精力的に創作活動をするかたわら、10月13日と14日の両日町民を対象に絵画指導も行った。最後には展示会を開催し、ここにもうひとつの芸術を通しての交流が花開いた。

1997年11月中旬には、オランダにあるアンネ・フランク財団が企画したアンネ・フランク展が、山田町の中央公民館で催された。町民に再度『アンネの日記』を紐解く機会を与えると同時に、ヒトラーが独裁政治を行った隣国のドイツに占領されたオランダの歴史、そして戦争、とりわけホロコーストの残虐さと平和の尊さを再確認させるパネル展となった。

5．ザイスト市長と山田町長との相互訪問

1997年2月26日から3月1日までクリステリック・カレッジ・ザイスト校の校長と教務主任が山田町を訪れ、同校の中学生の派遣について相談し、相互交流の実現をはかった。ザイスト市との交流の主要部分を占める中学生の相互派遣が現実味を帯びてきたところから、1997年10月21日山田町議会全員協議会は、ザイスト市に友好都市締結の申し入れをすることについて承認した。これを受けて、同年11月15日から25日まで第3回山田町海外研修の一行に同行していた助役が、ザイスト市長に町長の親書を手渡し、正式に友好都市締結を申し入れた。

1998年は2000年の締結に向けて、最後の加速を行う年となった。その合図を鳴らす役割を果たすかのように、3月に1台600万円[23)]するオランダの楽器であるストリートオルガンを購入し、鯨と海の科学館で1カ月にわたり開催されたオランダ展に花を添えた。次に、6月10日山田町教育委員会は、ヘスリンク氏の『オランダ人捕縛から探る近代史』の日本語訳を、ブレスケンス号の山田湾入港の日（6月10日）に合わせて出版した。時をおかずして6月12日から21日まで、宮古広域7市町村の共催で「国際交流フェスティバル'98」を、山田町を会場として開催した。アムステルダム・バロック・オーケストラ公演、シンポジウム、講演会、ハンガリーの子供たちの図画展、物産展など多彩なプログラムが組まれたが、招待客の中にザイスト市長夫妻の姿もあった。山田町長は市長と会談し、2000年に友好都市締結が実現できるようお互いに努力することを確認した。この席でザイスト市長が山田町長にザイスト市訪問を招聘した。これを受けて、翌年の1999年11月初旬町長、議長、副議長が山田町・ザイスト友好訪問団とともにザイスト市を訪れ、正式締結に向けて友好盟約の宣言を取り交わした。前月の10月にはクリステリック・カレッジ・ザイスト校の第1次友好訪問団の来町が実現し、友好都市締結への準備が万全となった。

V　山田町とザイスト市との友好都市締結

2000年5月13日山田町中央公民館を会場に、ザイスト市から市長や助役を迎え、ローベルト・ミルデルス在日オランダ公使の立会いのもと、両市町長が友好関係を結んだ。岩手県の市町村の中で、17世紀まで歴史をさかのぼり、友好（姉妹）都市提携を結んだ自治体は皆無である。さらに、オランダの都市との締

結は初めてであり、その意味においても、稀有な事例として考察に値する。

1．友好都市提携の目的

黒澤孝山田町長とザイスト市のルドルフ・ブックホーベン（Rudolph Boekhoven）市長が署名した友好関係締結書の内容は下記である。

この締結書の当事者は、その交流が生徒の派遣団により始まり、それから相互の理解と友情が培われてきている日本国岩手県山田町とオランダ王国ユトレヒト州ザイスト市である。

西暦2000年における日蘭交流400周年を記念して、この締結によって成立される友好関係の目的は以下のとおりである。

1．文化の分野において、山田町とザイスト市の間で、交流及び協力をすること。

2．他の分野における交流及び協力の機会と可能性を調査し明らかにすること。

3．山田町とザイスト市及び日本国とオランダ王国のすえ変わらぬ友好関係を促進すること。

日本国山田町とオランダ王国ザイスト市は、共にここに友好関係を結ぶことに同意する。

他の分野の交流の可能性を探ると第2項目に記されているが、第1項目に文化の分野における交流が置かれ、力点が文化にあることが察せられる。

2．友好都市提携関連の行事

友好都市提携記念式典の席上、次の人たちに感謝状が送られた。彼らの働きなくしては、友好都市締結は実現を見なかったであろう。最大の功労者は、クリステリック・カレッジ・ザイスト校とロイヤル・ハーグ・フットボールクラブを紹介したオランダ王室私設顧問のエリック・ハーゼルホフ氏である。クリステリック・カレッジ・ザイスト校のフレッド・スティーンスマ（Fred Steensma）校長は、中学生の相互交流の道を開き、教育の分野で大きく貢献した。コニー・ヨングブルッドゥ（Conny Jongbloed）氏はロイヤル・ハーグ・フットボールクラブ少年団の団長として来町し、スポーツ交流の端を発した。歴史的な側面からブレスケンス号事件を調査し、『オランダ人捕縛から探る近世史』を著したのはレイニアー・H・ヘスリンク氏である。

山田町は「山田オランダyear 2000」のために約2千3百万円の事業費を計上し、数々のプログラムを展開した。目玉のひとつが、5月14日に上演されたミュージックシアター「出島の頃」である。この舞台は日蘭交流の幕開けを再現したもので、当時のままに復元された楽器に合わせてオランダの宮廷舞踏が華やかに繰り広げられた。

Ⅵ　山田町とザイスト市の概要

ここで、友好都市交流の当事者である山田町とザイスト市について、特徴をおさえながら略述する。

1．山田町の概要

「響きます　人・海・森のハーモニー」を町のキャッチフレーズとしている山田町は、第7次山田町総合発展計画（2001年～2005年）を展開中である。「豊かな自然と調和して、人と産業が光るまち」の実現をめざし、地域の特性を生かしたまちづくりを指向している。キャッチフレーズにもあるように、山田町の特徴は第一に広大な海を擁していることである。2005年2月17日岩手県文化財保護審議会は、7世紀末

から8世紀の古墳時代から奈良時代にかけて造られた山田町の房の沢古墳群から発掘された228点の出土品を、県指定文化財に指定するよう県教育長に答申したが、古墳に納められた副葬品には北海道や東海地方との交易を実証する土器も多く、山田町は古くから海を舞台に外部と広範な交流を繰り広げてきた。この歴史が物語るように、岩手県沿岸部陸中海岸国立公園（1955年指定）のほぼ中央に位置する山田町の大きな財産は海である。町民憲章にも「海の青　山の緑を永遠に守りつづけてまいります」と謳われているように、町民は紺碧の海に活躍の場を求め、それを大事に守り育ててきた。海は山田町民歌では「躍る黒潮　太平洋　めぐみの海にはぐぐまれ」と言及され、町民は親潮と黒潮が交差する豊かな漁場から、生活の糧の多くを得てきた。長崎や江戸との海産物を主とする交易も盛んに行われ、御蔵山と呼ばれる丘陵に盛岡藩の物成収納庫として御蔵が設置されていた。現在も6,835総世帯数のうち17%強の1,188世帯が漁業に従事し、おきあみ類、さけ・ます類、さんま、するめいか（魚種別漁獲量上位4種）などを獲って町の経済を支えている。海の十和田湖と形容される波静かな山田湾に浮かぶ4,500台の養殖筏では、カキ・ホタテが養殖され、育てる漁業も推進されている。特に、殻付きカキは山田町ブランドとして全国的にも有名で、東京築地市場で扱う殻付きカキの6割が山田産である。

カキの他に全国的に名前が通っているのがまつたけである。2003年1月1日現在山田町の総土地面積263.44km^{2}のうち、92.9%（244.84km^2）を山林が占めている[24)]。長岩森や古宿森など標高700mを超す山々が並んでいる。天然林と人口林がほぼ二分しているが、人工林の主たる樹はあかまつ・くろまつであり、秋には山の幸であるまつたけをもたらしてくれる。

これら漁林業の他に、山田町は観光業も盛んである。赤平の断崖をはじめとしてリアス式海岸の絶景が、観光客を魅了する。大島のタブの木は自生北限地として、また大沢の臥龍梅はともに岩手県の天然記念物に指定されている。国立公園船越半島の付け根には船越家族旅行村が整備されており、オートキャンプ場、キャビンハウス、海水浴場、プール、室内スケート場などがある。そのほかに、教育的施設として鯨と海の科学館があり、かつて捕鯨基地[25)]として栄えた山田町の歴史が体系的に解説され、巨大マッコウクジラ（体長17.6m、体重60ｔ）の骨格標本も展示されている。

町の特産として最近注目されているのが、シューリガイ（ムラサキガイ、ムールガイとも呼ばれる）のアクセサリーである。1999年海のしずく工房が設立され、本格的な製作が開始された。これまで養殖施設などにはびこり、漁場ではじゃまもの扱いされていたシューリガイであるが、細工が施され、ペンダントやイヤリングなど20種類以上のアクセサリーに姿を変え、地元はもとより近隣のホテルや道の駅などでも販売されている。客の反応は好評で、万単位の値段の商品も求められるようになり、加工作業員たちは製品開発に余念がない。2005年3月19日に三陸縦貫自動車道（仙台市と宮古市を結ぶ約220kmの自動車道）の大船渡三陸道路が開通し、交通網の確立とともに販路の拡大が期待されている。

山田町は岩手県の市町村の中で、財政的に決して豊かな自治体ではない。岩手県統計協会が発行した最新の数字[26)]によると、山田町の一人当たりの所得水準は1,886,000円（2001年度）であり、この数字は岩手県の全市町村の平均2,475,000円より低い。岩手県の2001年度の市町村純生産を前年度と比較すると平均で7.6%減であるが、山田町も39,578百万円から37,395百万円に下り（5.5%減）、町も個人も財政的には潤沢ではない。

この経済状態を反映するように、人口の減少が続いている。現在の山田町が成立するのは1955年である。1889年の町村制施行にともない山田町、豊間根村、織笠村、船越村、大沢村が誕生したが、これら1町4カ村が合併して山田町となった。2000年の国勢調査によると町の人口は21,214人である。5年前の国勢調査では22,019人であったので、805人の減少ということになる。1980年の25,321人をピークとし、それ以降はほぼ毎年減少している。一方、65歳以上の人口比率は1995年の20.0%から2000年は23.7%に増加してい

るので、高齢化率は確実に上昇している。

教育面においては、2004年年4月1日現在、小学校9、中学校2、高等学校1が存在する。高等学校進学率は94.8%である。

山田町はザイスト市の他に、国内に姉妹（友好）都市を3カ所持っている。1985年に千葉県山田町、長野県上山田町と姉妹都市、そして1990年には青森県平賀町と友好親善都市の提携を結んでいる。小中学生のホームステイを中心に、物産の交流なども行っている。

2．ザイスト市の概要

ザイスト市に関する英語の資料は極端に少ない。市のホームページ[27]の英語版（1ページ強）やインタビューの際に提供された情報に依拠して概略することにする。オランダのほぼ中央を占めるユトレヒト州に属するザイスト市の大きな特徴のひとつは、国内のほぼ中央に位置し、鉄道、高速道路など交通の便が大変良いことである。古くから東西南北の交通の要衝であり、州都のユトレヒトまで約10km、首都のアムステルダムまで快速電車で約40分である。女王の宮殿、国会議事堂、国際司法裁判所などがあるハーグや、世界最大の貿易港を誇る商業都市のロッテルダムも車で約1時間と、それほど遠くない。成田からヨーロッパの空の玄関口であるスキポール空港まで、直行便で約12時間である[28]。

ザイストは当初Seistと綴られていたが、すでに838年にこの名が文献に現れてくる。放牧用の土地が広がり、ザイストでは古くから牧畜が営まれていた。1180年ローマカトリックの教会が建立されたが、1841年ネオゴシック式の教会を建てるためにほとんどが取り壊され、今では塔だけが12世紀の建築様式を伝えている。1677年ベルサイユ宮殿を模してザイスト城が築かれた。1924年市の所有となり現在は会議場や結婚式場などとして使われているが、1745年新教徒の集団であるモラビア兄弟団（The Moravian Brotherhood）に属するコルネリウス・シェリンガー（Cornelis Schellinger）がザイスト城を購入し、それをチェコ東部モラビアのハーンハット（Hernhut）から逃れてきた信者に提供した。城の前の2画に建物が建てられた。1画は女性用にあてられ（the Sister's square）、未婚の女性と寡婦のために各々棟が建てられ、他の1画には1棟が建てられ、未婚の男性が住んだ（the Brother's square）。彼らは生計を立てるために、パン、ボタン、銀細工、錫細工を作った。製品は住居の一隅で売られ、これがオランダでのデパートの起源となった。ナポレオンの妻やアレキサンダー1世などもここに足を運んだ。今日でもザイスト市は国内でも有数な店が軒を連ね、商業が盛んである。このスクエアの周辺には、National Historic Landmark Society や ICCO（Interchurch Organization of the Development Cooperation）の事務局が入っている建造物が立っている。

19世紀初頭Vecht川の周辺は邸宅を建てるのに土地が不足していたため、中産階級の上層部の人々（the upper middle class）がザイスト市に移ってきた。うっそうと茂る木立の中に広大な屋敷が点在しているため、ザイスト市は“Pearl of the Country Manor Belt”と呼ばれる。

2003年現在オランダには489の自治体があるが、ザイスト市はその規模において53番目に位置する。人口は2003年1月1日現在59,799人である。1991年が59,363人、1995年が59,004人、2000年が60,020人と推移し、2001年が59,844人、2002年が59,682人なので百の単位で微増減を繰り返し、この10年間位を取ってみると大きな変化は見せていない。その内訳は約40%が外国人で、150の違う国の人々が多様な文化を共存させている。1999年筆者が高齢者施設を訪ねた時に聞いたところでは、高齢化率は約18%だそうである。

ザイスト市には世界自然保護基金（WWF: World Wide Fund for Nature）、オランダ鳥類保護協会（Dutch Society for the Protection of Birds）、オランダ王立フットボール連盟（Dutch Royal Football Federation）の本部があり、自然保護、環境問題、スポーツなどに対する市民の関心が高い。

ザイスト市を説明する最後に、当市出身のギード・H・F・フルベッキ（Guido Herman Fridolin

Verbeck　1830－98）に触れる。早稲田大学は、「もしフルベッキが来日しなかったら、今日の早稲田大学は無かったかも知れない、といっても過言ではないでしょう。なぜなら、幕末に長崎にきた彼が、キリスト教布教のかたわら英学を教え、そこで学んだ大隈がやがて日本の近代化をめざして、東京専門学校を創立することになったからです。それほど彼は、若き大隈の識見と人格形成に大きな影響を与えた人だったのです[29)]」と、フルベッキに絶大な賛辞を惜しまないが、彼は現代の日本においては、ほんの一握りの人々の脳裏にしか記憶されていない。

1830年にザイスト市に生まれたフルベッキは、1859年29歳で来日後、68歳で亡くなるまで約40年間日本に住み続けたが、その間の活躍は下記のようになる。

> 例えば、日本に最初にやって来たプロテスタント宣教師の一人として、幕末の長崎での新知識の伝達者として、明治維新政府の蔭の最高顧問として、ドイツ医学導入の支持者として、東大創設の基礎固めをしたお雇外国人として、旧約聖書詩篇の名翻訳者として、あるいは日本語の上手な名説教師として、等々、その名は幕末維新の政治史、キリスト教史、英学史、さらには地震学史にまで取り上げられている。また、東大、明治学院、早稲田などの学校史にも写真つきで登場する[30)]。

日本の近代化に大きな足跡を残したフルベッキであるが、彼の功績の中でも、外国との直接的な接触ということでは、第一に、岩倉具視を全権大使とする使節団を欧米に派遣する事業を立案したことを挙げなければならない。フルベッキは新しい日本を担っていく指導者が、近代国家の政治、経済、文化などのあらゆる面をその目で観察し、肌で体験する必要性を説いた。国際化のかけ声とともに外国視察が盛んになる昭和の時代よりもはるか以前に、フルベッキは国際交流、あるいは交流とはいかなくても実際に外国の土を踏む重要性を認識していた。

Ⅶ　友好都市提携後の交流

1．山田町の国際交流事業

2000年のザイスト市との友好都市締結に向けて、山田町ではオランダ熱がいやがうえに高まっていたが、1999年５月24日日蘭交流友の会が設立された。友好都市提携前の創設であるが、その後友の会はザイスト市との絆を強固にするうえで、大きな役割を担っていくのでここで論じることにする。さらに1996年設立の山田町国際交流協会も、ザイスト市との交流において深い関わりを持つので、多少言及することにする。

１）日蘭交流友の会設立

日蘭交流友の会の母体となったのは、これまでオランダなどに４回派遣された海外研修の参加者たちと、中学生ジュニア大使としてオランダなどに派遣された生徒の保護者たちである。会の目的は、「オランダ王国との交歓交流を通して文化的、民族的な相互理解を深めることにより国際親善に寄与し、民間外交の一翼を担うとともに、山田町における日蘭交流事業の推進に貢献すること[31)]」である。この目的を達成するために、次の事業を行うと記されている。

(1)　山田町における日蘭交流事業への積極的な参加及び協力
(2)　オランダに関する知識習得のための講演会・講座等の開催
(3)　オランダからの来訪者の受け入れ支援及び交流会等の開催
(4)　オランダ友好親善訪問団の派遣

(5) 国際交流団体等との連絡協調

(6) その他前項の目的を達成するために必要な事業

設立段階での会員数は80名であったが、海外研修の参加者たちと、中学生ジュニア大使としてオランダなどに派遣された生徒の保護者たちが毎年ほぼ全員会に加わり、2002年6月1日現在123名を数えている。初年度の主な活動としては、10月14日から4泊5日の予定で山田町を訪問するクリステリック・カレッジ・ザイスト校使節団の受け入れと、その資金を確保するための募金活動が挙げられる。これ以降クリステリック・カレッジ・ザイスト校使節団の受け入れは、友の会の活動の大きな柱となっていく。1年目はこの他に、10月31日山田町で公演した、オランダを中心に活躍しているバロックオーケストラのファン・ヴァセナールと交歓会も持った。

年会費は個人が3,000円、団体が10,000円であり、年間予算額は2001年度を例にとると772,000円である。100万円を大幅に下回り、決して大きな団体とは言えないが、民間レベルでは看過できない機動力を持つ会である。

初代会長には建設会社社長の伊藤敏氏が選出されたが、副会長として沼崎喜一氏が名前を連ねていることに注目しなければならない。ザイスト市との友好都市締結の大役を果たした直後に辞任した黒沢孝町長の町政を引き継いだのが現町長の沼崎氏であり、ザイスト市をはじめとしてオランダとの交流が断絶することなく続いているのは、第4回海外研修事業に参加し、国際交流に強い関心を持っている町長が選ばれたことも大きな要因である。

会員が名付け親となった会報誌「風車」の発行も年に数回を数え、オランダそしてザイスト市についての、会員への啓蒙に大きな役割を担っている。

山田町日蘭交流友の会が主催した「第1回オランダ訪問団2001」が2001年5月19日から26日に実施された。15名が参加し、1人当たりの費用は約33万円であった。

2）山田町国際交流協会

日蘭交流友の会はオランダとの関係に特化しているが、一方山田町国際交流協会は対象を大きく広げ、「国際理解の啓蒙と推進、外国人との交流事業、国際交流全般」を事業の対象分野としている。日蘭交流友の会発足より3年前の1996年6月1日、山田町国際交流倶楽部が産声を上げたが、翌年の6月21日には全町的な団体となるべく山田町国際交流協会と名称を変え、再出発した。協会の目的は、「国際交流の担い手たる民間各種団体や町民一人ひとりが中心となり、本町の国際交流をより活発に展開し、町民の国際化への理解を深め、親しみやすい町、山田を築き上げるために寄与する[32)]」である。平成16年度の事業内容は多岐に渡っている。キッチンからの国際交流と題された国際理解講座の実施、英語、中国語、そして町内在住外国人のための日本語の各講座の開催、広報誌の発行とホームページの開設、鯨と海の科学館の英文パンフレット作成、水産加工技術研修生との交流など枚挙に暇がない。

山田町国際交流協会と日蘭交流友の会は両輪となって、山田町の国際交流、特にザイスト市との交流を推進しているが、これまでの最大の事業のひとつは、2001年9月29日に開催された山田町とザイスト市との友好都市締結1周年記念フォーラムである。平成13年度岩手県地域活性化事業調整費導入事業の一環として行われたディスカッションは、山田町国際交流協会が主催し、山田町日蘭友好友の会が21の後援団体のひとつとして名を連ねている。「山田町・ザイスト市の民間交流を考える」と題されたタイトルのもと、中山利彦氏（山田町国際交流協会常任理事）をコーディネーターとして、荒野泰典氏（立教大学教授）、レイニアー・H・ヘスリンク氏（北アイオワ州立大学準教授）、J・N・ウェスタホーベン（J. N. Westerhoven）氏（弘前大学助教授、オランダ出身）、フレッド・スティーンスマ氏（前クリステリッ

ク・カレッジ・ザイスト校長）によって討論が繰り広げられた。

3）オランダ文化の導入

『中世の秋』(1919) を著したオランダの著名な歴史家であるヨハン・ホイジンガ（J. Huizinga 1872－1945）は、人間を「ホモ・ルーデンス」と定義したが、その意味は「遊ぶ人」である。オランダ人もサイクリング、水泳、スケートと一年を通して、日常生活にバランス良く遊びを取り入れている。そのオランダ人の気質を山田町に移入し、町民はイベントとして山田版フィーエル・ヤッペン（運河跳び競技）を採用している。運河はこの150年の間に78埋め立てられたが、それでも今日アムステルダム市内には165の運河が張り巡らされており、運河はオランダ人にとって日常風景のひとこまである。山田版フィーエル・ヤッペンは1本の長いポールだけを頼りに運河に見立てた所を跳ぶのであるが、対岸に届かず途中で河中に水没する人が続出し、跳ぶ人にとっても観衆にとっても笑いを誘う、大変おもしろいオランダの伝統的なスポーツである。

植物もまたオランダ文化の一翼を担っている。船越家族旅行村には、17世紀の30年代に球根が投機の対象となり、新築の家と同じ価格にまで跳ね上がったチューリップ（トルコ原産）がオランダを代表する花として植えられており、4月中旬から約1カ月間約8万株のチューリップが訪れる人々の目を楽しませてくれる。最盛期の1870年代までには約1万基あった風車（風車もまたオランダが中東から導入したアイディアである）は現在約950基にまで激減してしまったが、オランダを象徴する風物であることに変わりはなく、船越家族旅行村にはミニチュアの風車が配されている。チューリップの庭園と風車が山田町とオランダとの関係を具象するものとなっている[33]。チューリップは船越家族旅行村だけで見られるものではなく、在日オランダ大使館から贈られた球根は、山田町の各小学校で大切に育てられている。

2．ザイスト市の国際交流事業

1）デ・ホフライス（Hofreis）財団

山田町との交流を円滑に運営していく母体としてザイスト市―山田町交流推進委員会が存在していたが、これを発展的に解消させる形で、2002年1月財団法人デ・ホフライス[34]が発足した。デ・ホフライスとは江戸参府の意味であるが、ザイスト市は文化の交流を求める旅の意味を込めている。交流推進委員会はこれまでもザイスト市から助成金という形で経済的な支援を受けてきたが、財団法人にしたのは、そうすることで企業などからの支援が容易になり、活動を拡充することができるであろうと期待してのことである。フレッド・スティーンスマ会長が語るには、当面の課題はデ・ホフライスという国際交流機関を市民に周知させるということである[35]。この課題を解決するひとつの方策として、2003年6月29日の日曜日にオープンデーを開催したが、100名以上の来場者があり、10名ほどがデ・ホフライス財団に加入した[36]。スティーンスマ会長やコニー・ヨングブルッドゥ理事を始めとして、事務局長、経理担当など本部委員として10名が名を連ねている。顧問委員会も存在し、ザイスト市長、前在日オランダ大使、オランダ王立サッカーリーグ会長など6名が適切な助言を施し、財団をサポートしている。

会費は25歳までが10ユーロ、それ以上は15ユーロである。主な活動は、日本語講座の開催、日本文化の夕べ、「蘭日」と題されたニュースレターの発行（200部）などである。2004年度の文化活動を具体的に見てみると、日本映画の紹介と上映会、能の紹介、伝統音楽と現代音楽の説明、日本料理の講習会などが挙がっている。ザイスト市役所同様、デ・ホフライス財団も山田町からの訪問者を受け入れ、彼らの滞在を支援する。

2003年2月15日の山田町代表団との意見交換の席で、会長は様々な施策を発表し、大変積極的な姿勢を見せている。例えば、資金を集めるためにザイスト市と山田町の写真を織り込んだカレンダーを作成し販売する、山田町の高校生を半年位受入れる、交流を産業面にも広げそれをビジネスに繋げていくなどである[37]。

２）「日本委員会」（国際交流委員会）

クリステリック・カレッジ・ザイスト校では日本委員会（Japan Comittee）を設置して、山田町の中高生の受入体制を整えている。発足当初からリンデンラーン校舎（クリステリック・カレッジ・ザイスト校はリンデンラーン校舎とケルケボッシュ校舎に分かれている）の校長として委員長を務めていたスティーンスマ氏は2000年に退職したが、今でも重要なメンバーである。６名の構成員からなり、日程やプログラム、ホストファミリーの斡旋など全てにわたって計画を立案し、実行に移す。ザイスト市内見学やユトレヒト市への小旅行などの時も、付き添いと案内役をかってでる。１月にザイスト市を訪れる中高生を歓迎するために、鯉のぼりをロッテルダム日本人学校から借り出すのは、彼らの優しい心遣いの表れである。

Ⅷ　山田町の中学生派遣事業の内実

大人を対象とした海外研修派遣事業は、私たちが同行を許された1999年と最新の報告書が出された2004年とを比較すると、内容の充実が図られていることは一目瞭然である。前者はザイスト市と友好都市提携を結ぶ前であり、さらに１年前ということで町長が市長と友好盟約の宣言と承認書に署名するなどセレモニーの色彩が濃かった。常に分刻みの行動を余儀なくされ、ザイスト市をまさに疾風のごとく通り過ぎ、さらにベルギーとイギリスを回るというハードなスケジュールが組まれていた。しかし、2003年２月13日から２月20日に実施された研修は、ザイスト市に特化し（ハーグとアムステルダムに各1泊）、９名の参加者は各々研修テーマを持ち（ザイスト市の行政、クリステリック・ライシーアム・ザイスト校、デ・ホフライス財団、オランダの地域福祉など）、さらに希望者には２日間のホームステイの機会も与えられている。通訳研修生を町民から公募するなど新しい企画も押し出されている。そして、ザイスト市やデ・ホフライス財団との話合いの結果明確になった問題点や提言なども、詳細にまとめられている[38)]。

しかし、これまで一番長く続き、しかも将来を担う青少年の育成ということで山田町が最も力を注いできたジュニア研修については、ホームステイ期間の長い短い、訪問場所の多い少ないなど技術的な差異はあったが、この10年間ほとんどと言ってよいくらいに、参加者の集団的、画一的な行動のもとに、同じ内容の報告書が作成されてきた。これまで研修内容や成果に関して、客観的な評価や分析がなされたことがなかった。

竹下登内閣時代の1988年と1989年に全国の市町村に一律措置された１億円の地方交付税（通称「ふるさと創生基金」）をもとに、山田町は２億２千万円を資本金として、1990年に「光る海と緑豊かな町づくり事業」を立ち上げた。二つの大きな柱は中学生の海外研修事業と大人を対象とした国内外派遣研修事業である。前者にはその後高校生も加わるようになったが、2002年９月13日告示第52号をもとにして実施要領を概説する。第1条の目的には、「この事業は、町内の中学生、高校生をオランダ王国へ派遣し友好親善を深めるとともに、国際理解教育を推進することを目的とする」と掲げられている。派遣内容は、「山田町ジュニア海外使節団として友好親善の役割を果たすため、ザイスト市クリステリックカレッジの授業等への参加や一般家庭へのホームスティを行うとともに、日本国大使館、ザイスト市役所、ロッテルダム日本人学校等を表敬訪問する」である。派遣人員は10名とし、生徒数に応じて、山田中学校に６名、豊間根中学校に２名、山田高等学校に２名が割り振られている。選考は山田町教育委員会が面接を基にして行う。参加者の負担額はこの事業に要する経費の10分の２以上となっている。聞き取り調査によると、全費用は35万円から40万円ということなので、個人負担は７万円から８万円ということになる。法外な金額ではないので、全ての生徒に参加の機会が与えられているということになる。

最初に、中高生が２日間だけ通うクリステリック・カレッジ・ザイスト校の概要を示す[39)]。

1．リンデンラーン校舎
　1）VWO：中等教育大学進学コース
　2）HAVO：シニア一般中等教育
　3）MAVO：ジュニア一般中等教育
2．ケルケボッシュ校舎[40)]
　1）テクニカルコース：自動車整備、金属、木工加工など。
　2）ドメスティックコース：医療、福祉。
　3）商業コース：事務処理。

次に、参観する授業の一例を示す。第6次派遣団（2001年1月8日～1月18日）の2日目（1月12日）ものである。

リンデンラーン校			ケルケボ（ッ）シュ校	
	生徒2名	生徒2名		生徒4名
9:15	Sport	Drama	9:20	Metal work
10:05	Sport	Drama	10:25	Metal work
11:20	Mathematics	Physics	11:15	Art
12:10	Drawing	English	12:30	Art
13:30	Biology	Handicraft	13:20	English
14:20	English	Mathematics		

（出所：「平成12年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、11頁より作成。）

ホストファミリーの職業にはあまり言及がないが、知ることができた限りでは、医師、会社社長、歯科医、弁護士、大学教授であり、比較的裕福な家庭がホストファミリーの役を引き受けていると言えるであろう。

第1次派遣団から最近の第10次派遣団の報告書を精読すると、このプログラムに山田町とクリステリック・カレッジ・ザイスト校が、真剣に取り組んできた姿を垣間見ることができる。報告書は絶えず改善を図り、良いものにしていこうという両者の熱意を映し出している。この事業のハイライトであるホームステイも最初は一家に2名であったが、第2回目からは1名となり、期間もホームステイ先と生徒の要望により3泊、4泊と延び、第8次派遣からは6泊となった。さらにこの年から高校生も2名加わることになり、年齢の層に幅が出た。引率者もホームステイに加わることになり、内容の一層の充実が図られている。

大多数の参加者にとって初めての外国訪問であり、その緊張感と感激が如実に伝わってくる報告文となっている。2005年1月7日から1月17日に実施された第10次派遣団の旅程を概括する。1月7日：成田泊、1月8日：アムステルダム着、1月9日：アムステルダム市内観光、1月10日：ザイスト着、この日から1月14日までホームステイ。ザイスト市内見学。1月11日：ザイスト市近郊への遠足。1月12日と13日：授業参観。1月14日：アムステルダム日本人学校と在オランダ日本大使館訪問。1月15日：ユトレヒト、アーネム（デ・ハール城）見学。アムステルダム離陸。1月16日：成田着。1月17日：山田町着。ホームステイなどの期間の長短はあるにせよ、授業参観の日数は2日間と一定であり、毎年大きな変更のないプログラムである。しかし、参加者が毎年異なっているのに、報告書の内容がほとんど同じなのは一体どうしてであろうか。その謎を解く鍵が新聞記事の中にある。見出しは皮肉にも「**手話で**（強調は筆者）クッキングレッスンを受ける日本の少年たち」となっている。その詳細は以下である。

家庭、保健、福祉の講師モニク・ファンデルネウト先生は、この交流を良いものだと感じている。先生は続けて、日本からの生徒には、一から十までおしえなければならないし、また、言葉ではだめなので、手話を活用し

なければならなかった。このコースでは、1週間4時間の調理授業を受けている。生徒の中で、日本の生徒もしっかり勉強しなければならなかっただろうと話してくれた。

同じ授業を受け、同級生として指導したカーレン・クスターマン（14歳）女子は、私がボディーラングウェジで説明すると、うまくその通りにまねてやるので、よかったが、もっと英語が通じないのかとても残念だ。日本のことについて知りたいことが沢山あったのに……と話してくれた[41)]。

生徒たちの幾人かはこのクッキングの次の日は、前述の時間割にもあるように、メタルワーク（金属加工）の授業で時計を作る作業に従事した。またもや口を開くことなく身振り手振りでノウハウを教えられ、金属を相手に製作に励むのである。

ここでオランダの英語教育について、その特徴などを述べておく。TOEFL（Test of English as a Foreign Language）の2001年7月から2002年6月までの最も新しい集計結果によると、コンピューターではなく紙を用いたTOEFL（Paper-Based TOEFL Test）において、677点の満点中全体の平均点は560点であったが、オランダの平均点は574点、日本の平均点は485点であった。分母となる受験者数がオランダは81名、日本のそれは735名なので、一概には優劣を論じることができないが、中国の受験者数が105,156名でも平均点が日本より78点高い563点であることを考えれば、この数字は何かを示していることになる[42)]。

数字に依拠するまでもなく、オランダの日常生活の場面を見れば英語は普通に話されている。1999年オランダの高校と大学における英語教育と国際理解教育を調査するために、北のフローニンゲンから南のマーストリヒトまでオランダ全土を駆け巡ったが、タクシーに乗るにしても、駅で切符を買うにしても、郵便局で資料を日本に送るにしても英語でコミュニケーションを取ることが困難な場面は皆無であった。「オランダでは、どんな田舎町に行っても、英語ができればまあ普通の生活に不自由することはありません。八百屋さんでも、肉屋さんでも、スーパーのレジのお姉さんでも、みんな、ほどほどの英語が喋れるからです[43)]。」オランダ人は外国語を巧みに操るというのは、昔から揺るぐことのない評価である。調査に訪れたある高校の教師は、「オランダは小国で昔から海の外の国々と貿易をして国を成り立たせてきたので、英語は必要不可欠であった。英語、ドイツ語、フランス語を話すことは普通のことであり、ビジネス関係の人はさらにスペイン語を習得している。ただ最近テレビ、音楽、映画、インターネットなどの影響で、若者の間にイギリス英語ではなくアメリカ英語が蔓延しつつあるのが心配である」と語った。

こういう語学環境の中、コミュニケーションをとるに足る英語の技能、特に聴く力と話す力を十分に持ち合わせていない中学2年生が、友好都市交流の名の下に、いきなりクラスに入れられるのである。だから毎年「ほとんどわからなかった[44)]」が繰り返され、英語の授業でさえ「内容的に高度すぎ、中学2年生では太刀打ちできない[45)]」となり、「スポーツや手作業など体を使う授業になると生徒たちは元気[46)]」であるという光景が出現する。それがひいては、毎年どこに行った、何を買ったなどの行動の羅列に終り、人間が見えない、すなわち接した人々の考えやこちらの意見の披瀝がほとんどない報告書になってしまう大きな原因になっている。そこに身を置いて相手と会話を交わして、こんなことが解ったということがほとんどない。従って、本来研修が目指す知の習得の喜びが全然実感されず、読む者の動悸を早めずにはおかない文章に出会わないことになる。さらに、この事業の目的に掲げられている国際理解の痕跡を見出すことは大変難しく、物理的に一時外国に身を置いたという段階にとどまっている。

岩手県の自治体の姉妹都市交流を研究してから7年が経過し、この種の報告書を幾十冊も読んできた身には、山田町の中高生の報告書を精読しても、オランダ、そしてザイスト市が眼底に張り付かないのである。確かにゴッホ美術館はアムステルダム市でなければ見ることができないかもしれない。それなら、

ニューヨーク市のメトロポリタン美術館を訪れるのと、どれほどの差を生徒たちにもたらすのであろうか。あくまで初めて訪れた外国の都市の域を出ないような気がする。第10次派遣団の最も新しい報告書に「今後の交流発展に期待」と題して、引率を務めた山田町教育委員会事務局の職員が原稿を寄せている。彼女はこれまで看過してきたとは言わないまでも、真剣に考慮してこなかった問題を的確に指摘している。最初は英語の問題である。

> 生徒の英語能力についてですが、……学校（クリステリック・カレッジ・ザイスト校）、ホフライス、ザイスト市の国際交流担当者から口々に山田の生徒が英語を少ししかはなせないが非常に残念だと言われて来ました。耳が痛いほどでした。単語だけでなくせめて短文で会話できるように事前勉強をがんばってほしいと思います。
>
> また、これは今回の使節団に限ったことではなく、現在までの歴代の使節団もそうであったようですし、そしてまたジュニア海外使節団だけの話でもなく、成人団体の派遣の際も言われ、山田町に来たホフライスの方々からも言われます[47]。

面接を受け、山田町を代表している生徒たちであるが、残念ながら言語習得に対する熱意は必ずしも高いとは言い難い。「生徒は4泊5日のホームステイを終え、久しぶりに団員全員揃っての夕食である。みんなリラックスして日本語で会話する[48]」となり、「せめてオランダにいる間は英語で話そう！」とはならないのである。ましてや、帰国後はその機会がだんだん少なくなるので、英語を話すと言う雰囲気が中学生の間に醸成されず、毎年同じ言語の問題が浮上することになる。

次の指摘は、なぜザイスト市か、なぜ山田町かという問題である。

> ……ホームステイ期間中にザイスト市内の散策もあまりできなかったのではないかと思われます。……現地での交流をとおして、私は生徒を含めたザイスト市民、山田町民がどれだけお互いの市・町について知っているのかとふと疑問に思いました。……あまりお互いの市や町のことを住民同士が知らないのではないかと感じます。……彼ら（クリステリック・カレッジ・ザイスト校）の山田へ対する質問攻めが嵐のようだったことから見ても、もっと交流の幅を広げる手立てはあるのではないかと感じています[49]。

「全然理解できない。解らない」を毎年繰り返す授業を2日間参観し、ある時は数学の授業で日本語と英語で10までの数の読み[50]をやるよりは、プレゼンテーションで山田町のことを発したらどうであろうか。周到に準備を進めれば不可能ではない。そのためには選考を早め、準備期間を1年位かける必要がある。矢巾町と交流を続けているアメリカのミシガン州フリモント市はすでにこれを実践し、みごとな成果を上げている[51]。その指導体制も確立しなければならないが、この9年間でオランダを訪問した町民は200名を越え、人材には事欠かないはずである。さらに2004年の機構改革に伴い、山田町は教育委員会内に国際交流担当を設置し、通訳研修生の公募も始めた。生徒は行政の支援も大いに期待することができる。

あるいは、何かを成し遂げるには中高生の英語能力は十分でないので、発想を転換して、むしろそれほど遠くないライデン大学（16世紀に創立されたオランダ最古の大学で、日本学研究は150年の歴史を有する）には日本語が堪能な学生が少なからずいるので、彼らの協力を仰いだ方が賢明かもしれない。そして、個々人が何かひとつテーマを決めてそれについて探求するという姿勢を持っていれば、質問も頻発し、週末も全員で過ごすことなく、個々の興味や関心に応じた費やし方になるであろう。これこそ国際理解への入口となるであろう。あるいは、「広く、薄く」という方針を変更し、1人の生徒を1年間ザイスト市に送るという案が出てきても良い。

Ⅸ　むすび――友好都市交流の将来への展望

岩手県沿岸の人口2万人足らずの小さな漁村が、オランダのザイスト市と友好都市関係を締結してからこの5年間、後述の参考資料が明示するように、よくぞここまでと驚嘆させられるほど国際交流に心血を注いできた。在オランダ日本大使館も、「日本との姉妹都市、姉妹港は14あるが、山田町が一番活発な交流を進めている[52)]」と、それを認めている。もちろん山田町の真摯な取り組みがあってのことであるが、ザイスト市、クリステリック・カレッジ・ザイスト校、在日オランダ大使館、在オランダ日本大使館、ロッテルダム日本人学校やアムステルダム日本人学校などの機関を始めとして、スティーンスマ氏、コニー・ヨングブルッドゥ氏、豊間根出身でハーグ在住の平井美智子氏、そして毎年ガイド兼通訳を務めている山口千真氏などの個人が常に外枠を強固なものにして、交流が容易に進むよう多大に尽力したことも、これほど多彩な内容の交流を展開することができた大きな要因である。

筆者は1999年11月第5回山田町海外研修派遣事業に参加した一行に同行を許され、ザイスト市長にインタビューする機会を持った。なぜ姉妹都市ではなく、友好都市なのかという筆者の質問に、市長は理由として言語と距離を挙げた。市長はさらに言葉を続けて、「母国語がオランダ語と日本語という状況の中にあって、英語を用いてさえコミュニケーションをとることは極めて困難である。さらに、やはり山田町は遠い。密に直接的な交流を図ることは決して容易ではない。これらのことを考え合わせると、姉妹都市よりも枠組みのもう少しゆるやかな友好都市にしたほうが賢明であると判断した」と説明した。また、1998年当時山田町総務課国際交流係の鈴木隆康氏も『いわてグラフ』のインタビューに答えて、「義務感で交流するのではなく、心のきずなを守り育てる穏やかな国際交流が理想ですね[53)]」と語っている。確かに、「諸民族をひたすらその最も高貴で最も形式を具えた精神たち、すなわちその選良たちによって評価するように、自分の心情を育てていたので、すべての民族を愛するに価いするものと思っていた[54)]」エラスムス（Desiderius Erasmus 1466－1536）を輩出し、「中庸がもたらす穏和、静朗を好む[55)]」人文学者を尊んできたオランダの人々と、山田町民は交流を続けてきた。極端や過激を嫌悪する属性は理解できるが、それは曖昧さや不明瞭に通じるものではない。中心にはやはり確固としたものの存在が認識されなければならない。2004年12月12日岩手県国際交流協会が主催した姉妹都市交流のワークショップで、山田町日蘭交流友の会の会員は課題として、「お互いの交流目的の具体化をしたい。共通認識をもっていきたい[56)]」を挙げている。さらにザイスト市からは、1年単位の職員の相互派遣、1年単位の生徒の交換留学、山田町で毎年開催されるオランダ週間への職員の派遣、英語教師の派遣、両市町における特産品の販売、経済面への交流の拡大など具体的な提案が続出している。

山田町日蘭交流友の会の伊藤敏会長は「発刊に寄せて」と題する記事を創刊号に寄せている。その中で伊藤氏は、「この（山田町日蘭交流友の会の目的）根底には、この友の会を通じての人づくりをしなければならないだろう（という思いがあります）。これからの社会はインターネットなどの発達によって、国内外がボーダレスになりますので、この社会に通用する人づくりは急務です。今までのような金太郎飴的な地域づくりでなく、個性的な山田町を創ることを前提に、交流・連携を重要視し、国際感覚豊かな人づくりは、これからの重要な課題と考えます[57)]。」個性的な山田町を語るのであれば、岩手県の自治体で唯一オランダの都市と友好関係を結んでいることを前面に出してはどうであろうか。外国語指導助手（ALT）などが橋渡しをして、偶然に関係を結ぶようになった市町村と異なり、山田町とオランダとのつながりは、360年以上も前に遡るという歴史的な背景を持っている。この特異な事実を中心に据えて交流を進めていけば、他の自治体とは違ったユニークな国際交流が生まれると思う。中高生の派遣にしても、ある年はオランダの歴史教育はどのようになされているかを探るというテーマを設ければ、オランダで

クッキーを作るよりは、異国に身を置いた意義も深まるであろう。

あるいは、国土の面積（日本：約38万km²、オランダ：約４万km²）も人口（日本：約１億2,800万人、オランダ：約1,600万人、2004年現在）も日本の約10分の１であり、小国と呼ばれるオランダであるが、まだ記憶に新しい2004年12月26日のスマトラ沖大地震・インド洋大津波の被災地（オランダ人の死者・行方不明者数は63人）に対する民間の寄付金が、１億4,820万ドルに上った。一方、日本の民間寄付（日本人の死者・行方不明者数は79人）は、2,350万ドルにとどまっている[58)]。1999年のコソボ紛争の時にも、テレビで募金を呼びかけたコック首相に応じて、3,000万ギルダー（約15億円）が即座に集まった[59)]。政府レベルでもオランダは支援国である。2004年の途上国援助（ODA）実績を見ると、オランダは4235百万ドルで前年比伸び率は6.4%であり、国民総所得（GNI）比は0.74%で、経済協力開発機構（OECD）の開発援助委員会（DAC、22カ国加盟）の中で５位である。一方、日本は8859百万ドルで前年比は0.2%減であり、国民総所得比は0.19%で、開発援助委員会の中で20位である。しかも伸び率がマイナスなのは22カ国中日本だけである[60)]。国際貢献のひとつの目安となるこれらの数字は、一体オランダという国、そしてそこに暮らす人々の何を物語るのであろうか。迂遠なことのようであるが、このような点を糸口にして、研究を継続していけば、オランダ人の社会生活の根幹となる精神性も見えてくるのではないだろうか。相手を知らずして、健全なそして実りある交流は不可能である。

さらに、学ぶだけでなく発信も相互交流において不可欠である。デ・ホフライスの活動の中に日本の能や伝統音楽の理解は含まれているが、山田町の「や」の字も出てこないのは、寂しい限りである。クリステリック・ライシーアム・ザイスト校を訪れる山田町の生徒たちも、剣道や習字などの外に現れた様式に強調が置かれる文化を伝授することはもちろん大切であるが、その背後にある日本独自の考え方や世界観にオランダの生徒の目を向けさせることも、同様に、あるいはそれ以上に重要である。さらに、彼らはホストファミリーだけではなく全校生に山田町のことを伝える努力をしなければならない。派遣団員たちは、豪壮な美しさと繊細な美しさをあわせ持つ南北180kmに及ぶ海岸線を誇り、2005年５月国立公園指定50周年を迎えた陸中海岸国立公園に位置している山田町のことを、その歴史や漁業のことを語るべきである。最近グリーン・ツーリズムが脚光を浴びているが、山田町でも2005年３月24日「マリン・ツーリズム山田」が発足した。オランダ島（大島）や小島が浮かび、養殖いかだが整然と並ぶ山田湾の美しさと、漁業の面白さを前面に出して町をアピールする団体の存在は、国際交流にとって願ってもない援軍である。地元を直視する姿勢は、町が抱えている問題を浮上させることでもある。高齢化や過疎化の問題、町の財政状態など日常を正直に披瀝するところから、交流の第二ステージが始まるであろう。

ザイスト市との友好都市締結までには長い助走があったとはいえ、この５年間は模索の時期と解することができるかもしれない。山田町は一年一年を大切にして、ザイスト市との関係の強化と深化を図ってきた。これからの５年間に向けて山田町はどんな戦略を編み出すのであろうか。世界をまたにかけて活躍したオランダ人が築いてきた文化の深奥に触れ、魂の震えを覚えるような企画が出されるに違いない。いやがうえにも期待は膨らむ。

謝辞

この研究は、平成11年度岩手県学術研究振興財団の助成研究「岩手県の国際交流：姉妹都市との交流の現状と展望」の成果の一部である。

インタビューや資料収集にあたり、下記の方々には多大な支援と協力をいただいた。ここに記して、感謝の意を表す。

山田町：黒沢孝町長、佐々木良一議長、昆暉雄副議長、木村悌郎教育長、鈴木隆康氏（総務課国際交流係長）、佐々木幸博氏（総務課国際交流係主事）、花坂惣二氏（山田町教育委員会事務局学校教育チーム国際交流担当上席主査）。

ザイスト市：ルドルフ・ブックホーヴェン（Rudolph Boekhoven）市長、トース・ブックホーヴェン（Toos Boekhoven-Eikema）市長夫人、ウィン・デン・ヘイヤー（Wim den Heijer）市長代理兼都市計画と芸術・文化担当助役、ペーター・フェルミューレン（Peter Vermeulen）教育・社会問題担当助役、ルイス・スミット（Louis Smit）報道マネージャー、フレッド・スティーンスマ（Fred Steensma）クリステリック・カレッジ・ザイスト中学校校長、ライニール・ヘールス（Reinier Geers）クリステリック・カレッジ・ザイスト中学校大学進学コース主任。

（肩書や所属は調査を行った1999年当時のものである。但し、花坂惣二氏のそれは2005年4月現在のものである。）

注

1）佐藤智子、黒岩幸子、佐々木肇、「アンケート結果にみる岩手県の姉妹都市交流および国際交流の現状」、『総合政策』第2巻第2号、岩手県立大学総合政策学会、2000年、221－222頁。

2）大阪府門真市とアインドホーフェン（Eindhoven）、富山県黒部市とスネーク（Sneek）、福岡県柳川市とブレーデルヴィーデ（Brederwiede）、福岡県水巻市とエンメロールド（Emmeloord）、長崎県長崎市とミデルブルク（Middelburg）、福島県郡山市とブルンメン（Brummen）、神奈川県南足柄市とティルブルク（Tilburg）、山口県新南陽市とデルフゼイル（Delfzijl）、富山県砺波市とリッセ（Lisse）、埼玉県東松山市とナイメーヘン（Nijmegen）、そして秋田県大潟村とドロンテン（Dronten）である。（http://www.baibainet.com/infonl/shimaitoshi.html）

3）リーフデ（慈愛）号以外の船の運命は、次のようになった。ホープ（希望）号は行方不明、ヘローフ（信仰）号はオランダへ引き返し、トラウ（信義）号はモルッカ諸島のチドール島でポルトガル人に拿捕され、ブレイデ・ボートスハップ（福音）号はチリ海岸でスペイン人に投降した。このように惨憺たる航海となったため、派遣したロッテルダム株式会社は倒産の憂き目に遭うこととなった。

4）生存者の数を栗原福也は25名としている。（栗原福也監修、『オランダ・ベルギー』、新潮社、2000年、45頁。）一方、司馬遼太郎は24名としている。（司馬遼太郎、『オランダ紀行』、朝日新聞社、1994年、113頁。）また、鳥井裕美子も24名としている。（鳥井裕美子、「リーフデ号漂着異聞」、『日蘭交流の歴史を歩く』、KLMオランダ航空ウインドミル編集部編、1994年、183頁。）

5）『オランダ紀行』、13頁。

6）平成13年度岩手県地域活性化事業調整費導入事業、山田町・ザイスト市友好都市締結1周年記念、「国際交流フォーラムディスカッション――山田町・ザイスト市の民間交流を考える――」における、荒野康典立教大学教授の「400年におよぶ日蘭交流～歴史に学ぶ交流の姿～」の基調講演。
（http://www.rnac.ne.jp/^seisho/katudouda...i_koryu_2001-9-29/sankou_shiryou_1.html）

7）日本の情報をできるだけ収集するという任務を背負っていたので、フォン・シーボルトは夥しい数の資料をオランダに送った。それらの膨大なコレクションは、現在ライデンにある国立民族学博物館に収められている。ライデン大学植物園の日本庭園には、彼の胸像がある。

8）1860年勝海舟などがアメリカ行きの際に乗り込んだのが、この咸臨丸である。

9）福島県郡山市はファン・ドールンの生誕地であるヘルデルラント州ブルメン市と、1988年6月25日姉妹都市の盟約を結んだ。時代は下って昭和になるが、昭和32年（1957年）以来干拓が進み、当時の大事業と称された八郎潟においても、オランダから技術支援があった。秋田県大潟村は1960年代のほぼ同じ頃に干拓されたフレボランド州ド

ロンテン市と、1992年6月12日友好都市宣言に調印した。

10) 女性のためのアジア平和国民基金（アジア女性基金）：http://www.awf.or.jp/ianfu/country_or.html。

11) 磯村健太郎、「コラム私の見方――オランダ交流念を祝う前に――」、『朝日新聞』、2000年2月2日。

12) 賠償問題に対する在オランダ日本国大使館の対応などについては、以下を参照。宮原信孝、「オランダに勤務して」、http://fusetsu.org/otoko28/khaos/23miyahara.html。野田尚美、『オランダの顔――オテンバ外交官の日記から――』、文芸社、2002年、83－84頁、103頁、179－180頁、333－338頁、346－349頁。

13) 宮原信孝のホームページ。

14) アジア女性基金の主な事業は、元慰安婦に対して国民的償いをするため、国民から寄付を募る、元慰安婦への医療福祉事業に政府資金を支出する、国として反省とおわびの気持ちを表明するなどである。アジア女性基金はインドネシアでの福祉事業を最後に、2007年3月に解散することになっている。

15) 1994年2月28日、船大工山崎巌氏の手による、ブレスケンス号の模型船（実物の20分の1）が披露された。

16) レイニアー・H・ヘスリンク（Reinier H. Hesselink）、（鈴木邦子訳）、『オランダ人捕縛から探る近世史』、山田町教育委員会、1998年、15頁。

17)『オランダ人捕縛から探る近世史』、16頁。

18) ブレスケンス号の山田湾再入港の理由については、レイニアー・H・ヘスリンクの興味深い分析を参照。レイニアー・H・ヘスリンク、「ブレスケンス号事件」、『日蘭交流の歴史を歩く』、186－191頁。

19)『産経新聞』、1998年、6月29日。

20)「国際交流フェスティバル'98」は1998年6月12日から21日まで、三陸・海の博覧会記念基金助成事業として行われた。パンフレットに掲載された開催趣旨は次の通りである。「近年、国際化の進展に伴って、宮古市が中国、田老町、岩泉町及び田野畑村がアメリカ、山田町がオランダ、新里村がフィリピン、川井村が韓国の都市とそれぞれ地域、市民レベルで多様な国際交流、国際協力が行われており、その活動もいっそう活発化しています。……これからの国際交流を考えるとともに、国際理解を深め、国際親善に努める『国際交流フェスティバル'98』を開催します。」

21)『岩手日報』、1998年、5月16日。

22)『岩手日報』、1996年、10月15日。

23) 2005年4月1日から役場職員の時差勤務を施行し、年間およそ480万円を節約しようという山田町にとって、補助金があったとはいえ、バブル崩壊後の財政からすると小さい額のお金ではない。オランダ展の開催費用を含めた830万円の半額は、宮古地方振興局の地域活性化事業調整費からの補助金である。

24) 田（4.56km²）は1.7%、畑（5.03km²）は1.9%に過ぎない。

25) 山田町における大型クジラの捕獲は、1949年認可を得た日東捕鯨株式会社がマッコウクジラ、イワシクジラを捕えた時に始まる。最盛期の1977年にはマッコウクジラだけで893頭もの水揚げがあったが、世界の潮流として捕鯨反対運動が強くなり、ついに国際捕鯨委員会（IWC: International Whaling Commission）が商業捕鯨の禁止を打ち出すに及び、10年後の1987年山田町の捕鯨漁は幕を下ろすことになる。

26) 岩手県総合政策室調査統計課編、「平成13年度岩手県の市町村民所得」、岩手県統計協会、2003、1－9頁。

27) ザイストのホームページ：http://www.zeist.nl/otf/content.jsp?objectid=35。

28) 山田町の住民がザイスト市を訪問するとなると、山田町から盛岡市まで車で約3時間、ここで新幹線に乗って東京駅まで約2時間30分、さらに成田エクスプレスに乗り換えて成田まで約1時間である。どうしても前泊を余儀なくされる。

29) 早稲田大学のホームページ：http://www.waseda.jp/jp/okuma/people2/people201.html。

30) 砂田良和、「明治政府の師、フルベッキ」、『日蘭交流の歴史を歩く』、122頁。

31) 山田町日蘭交流友の会設立総会資料。日時：1999年5月24日午後6時。場所：山田町中央コミュニティーセンター。

32）山田町国際交流協会のホームページ：http://www.yira-ymd.jp/。

33）とはいうものの、岩手県内でもチューリップの名所は少なからずあり、30万本が牧場一面に咲き誇る藤沢町の館ケ森アーク牧場や、15万本が咲き乱れる軽米町の雪谷川ダムフォリストパークがつとに知られている。

34）出島にあるオランダ商館の館長の職務は、常駐している20名弱の職員を統括し、貿易を円滑に行い、公的な日記をつけることなどであったが、江戸参府（ホフライス）も重要な任務のひとつであった。館長は旧暦1月から3月頃、武器や珍しい動物など高価な献上品を携えて江戸に赴き、将軍に拝謁した。1828年帰国の際に荷物の中から国禁の日本地図や葵の紋のついた羽織が見つかり、日本を追放されたシーボルトは、1826年スチュルレル館長のもと江戸への旅に加わった。参府旅行の日数は平均90日であったが、この年は143日に及び、「一行総数百七人の多きにのぼっていたというから、内々の工作によってシーボルトは協力を得られる人物を三十人近くも加わらせていた、と察せられる。」（『日蘭交流の歴史を歩く』、94頁。）「日本における万有学的調査の使命を帯びていた」シーボルトにとって、江戸参府は願ってもない機会であり、『日本』、『日本植物誌』、『日本動物誌』の三部作を著した。

35）『ユトレヒトニュースフラット』、2002年1月28日。

36）財団法人デ・ホフライス編、「蘭日」、2003年11月、第2巻第3号。

37）山田町、「平成15年度山田町海外研修派遣事業報告書」、4－7頁。

38）「平成15年度山田町海外研修派遣事業報告書」、45－57頁。

39）山田町教育委員会、「平成11年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、20頁。

40）「平成12年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、8頁。

41）「平成10年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、49頁。

42）Educational Testing Service, "TOEFL Test and Score Data Summary," 2002－2003 Edition. TOEFL Web site: www.toefl.org.

43）リヒテルズ直子、『オランダの教育』、平凡社、2004年、167－168頁。

44）枚挙に暇が無いが、例えば、「平成9年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、41頁、43頁。

45）「平成11年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、21頁。

46）「平成10年度山田町オランダジュニア大使友情使節団派遣報告書」、13頁。

47）「平成16年度山田町ジュニア海外使節団派遣報告書」、46－47頁。

48）「平成12年度山田町ジュニア海外使節団派遣報告書」、14頁。

49）「平成16年度山田町ジュニア海外使節団派遣報告書」、47頁。

50）「平成12年度山田町ジュニア海外使節団派遣報告書」、3頁。

51）『総合政策』第4巻第2号、204－205頁。

52）「平成15年度山田町ジュニア海外使節団派遣報告書」、11頁。

53）岩手県総合政策室広聴広報課、「いわてグラフ」12号、1998年、11頁。

54）S. ツヴァイク、内垣啓一・藤本淳雄・猿田悳訳、『エラスムスの勝利と悲劇』、みすず書房、1998年、11頁。

55）斎藤美洲、『エラスムス』、清水書院、1990年、163頁。

56）いわて国際交流編集委員会、『いわて国際交流』62号、岩手県国際交流協会、2005、3頁。

57）『山田町日蘭交流友の会会報』、創刊号、山田町日蘭交流友の会、1999年7月1日、1頁。

58）『朝日新聞』、2005年1月16日。

59）『オランダの顔』、151頁。

60）『朝日新聞』、2005年4月12日と4月19日。

参考資料

山田町とザイスト市との友好都市交流史（オランダとの関係を含む）

年	月日	内　　容
1643	6.10	初めて山田湾にオランダ船ブレスケンス号が入港する。南部山田浦（現在の大浦）に着船し、心温まる交流をする。水を得て翌11日感謝して出帆する。
	7.28	同ブレスケンス号が水や食糧を求めて山田湾に再入港する。
	7.29	山田湾の海岸にスハープ船長と乗組員９名が上陸する。彼らは、南部藩の命により盛岡から駆け付けた家老七戸隼人直時、御目付漆戸勘左衛門によって捕えられ江戸に護送され、取調指揮官の井上正重によって取り調べられる。彼らが日本でのキリスト布教のメンバーかどうか聞きただす。彼らが布教のために日本に来たのではないという理由により解き放たれ、日本人とオランダ商人との交易ができた唯一の場所であった長崎に送られる。
1964		ブレスケンス号が山田湾に入港した史実に基づき、山田湾の大島を「オランダ島」と改称してはどうかと、山田町観光協会顧問三浦寅三氏より佐藤善一町長に提言があり、議会の承認を得て「オランダ島」と改称される。この時に、オランダ船ブレスケンス号の母港所在地であるオーストブルフ市との間で、姉妹都市の締結をしようという気運が持ち上がる。
1965		郷土史家川瀬一郎氏はブレスケンス号の航海日誌に関心を持ち、川瀬氏が10年以上も前からオランダ・ハーグ市の文書館から取り寄せている原文の写真複写を、中央大学文学部講師永積洋子氏に依頼し翻訳する。
1971		オーストブルフ市との姉妹都市締結に向けて具体的な準備が進められ、小林喜代治、川瀬一郎両氏を中心に関係古文書等の調査が行われる。
	10.26	山田ユネスコ協会が発足する。
	11.22	山田ユネスコ協会主催のオランダ展が開催される。山田ユネスコ協会の招請により在日オランダ大使一等書記官ハァン・ベルスロート氏が来町し、講演会を開催する。同氏に姉妹都市締結促進の協力を要請する。
1972	7.11	永積洋子氏が翻訳した「オランダ船長日誌」が岩手日報に連載される。（９月４日まで連載）
1973	8月	オランダ島祭が開催される。（1979年まで７回開催）
1974	9月	『南部山田浦漂着のオランダ船長コルネス・スハープの日記』（永積洋子訳）が、キリシタン文化研究会から出版される。
1975	11月	近藤大助町長の時、国連ユネスコ大使広永敬太郎氏、外務省松本俊参事官、オランダ国立観光協会日本支局長E・J・ヴァン・ヘルヴォール氏、岩手県警本部沼崎俊明氏（山田町出身）とその友人のC・B・ビスリップス氏（全米柔道連盟副会長・オランダ出身）、アークスター氏（オランダ）等により、オーストブルフ市スヒッペル市長へ本町からの意思の伝達が図られる。
1976	5月	オーストブルフ市スヒッペル市長から姉妹都市締結に「原則的に同意」との回答を受ける。しかし、締結に積極的だった市長の交代や財政難などで締結を断念する。
1981	7.17	日蘭文化協定が発行される。ハーグ市でオランダの首相と鈴木善幸首相（山田町出身）が相互署名する。（国レベルの出来事であるが大変興味深い。）
1986	5.20	佐藤仁志氏が『山田浦阿蘭陀船入津の追跡』を出版する。
	6.29	山田町中央公民館において町民劇「寛永の朝霧」が公演される。
1992	1.28～29	ハワイ大学助教授レイニアー・H・ヘスリンク氏がブレスケンス号山田港入港に関する調査のため来町する。翌29日、オランダ島へ上陸する。ブレスケンス号の船長らが捕縛された織笠細浦から、馬指野道視察や佐藤光作宅の訪問を行う。
	4.29	山田町中央公民館においてヘスリンク氏を講師に、「オランダ船山田港入港について」という演題の記念講演会が開催される。同氏はオランダ船入港350周年記念行事の橋渡しをする。

年	月日	内　　容
1993	7.28	大浦地区教育復興運動実践協議会と大浦地区運営委員会が、大浦集落入り口に「オランダ船大浦着船350周年記念説明板」を建立し、大浦沖の沢に標柱「ブレスケンス号着船の地」を建立する。
	7.29	ブレスケンス号山田港入港350周年記念事業が開催される。オランダ駐日大使ローランド・ファン・デンベルグ氏夫妻、オランダ王室私設顧問エリック・ハーゼルホフ氏夫妻、ハワイ大学レイニアー・H・ヘスリンク氏、東京大学名誉教授加藤栄一氏、中央大学講師行武和博氏、東京大学資料編纂所助手松井洋子氏や多くの来賓が式典に招かれる。「鯨と海の科学館」前の広場にオランダから贈られた「ザイフリボク」の苗木が記念植樹される。オランダ島で記念碑「オランダ船ブレスケンス号1643年7月28日ここに入港す」の除幕式が行われる。午後、ブレスケンス号山田港入港350周年記念式典が挙行される。引き続き、加藤栄一氏による「ブレスケンス号の南部漂着と日本側の対応」の講演会が開催される。その後、記念祝賀会が開催され、350周年記念を祝うとともに出席者との交流を深める。
	7.30	駐日オランダ大使ら一行が巡航船で山田湾を視察する。大浦では保育園児らの歓迎を受け、漁協庁舎において交流する。ブレスケンス号事件に関する史跡などを巡り、夜には大浦漁村センターにおいて、ヘスリンク、行武和博、松井洋子、佐藤仁志の4氏による記念講演会が開催される。
	10月	山田町はハーゼルホフ氏とコニー・ヨングブルッドゥ氏の支援により、ハーグ市のロイヤル・ハーグ・フットボールクラブとの関係がつくられる。
	12月	大浦地区教育振興運動実践協議会と大浦地区運営委員会が、「オランダ船入港350周年記念誌」を出版する。大浦地区全戸に配布される。
1994	2.28	ブレスケンス号模型船披露式が開催される。模型は船大工山崎巌氏によって作製されたもので、山田町中央公民館に展示される。
	3.11	ハーゼルホフ氏の支援によりクリステリック・カレッジ・ザイスト校と山田町は関係を持つようになる。
	4.28	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され出席する。
1995	1.13	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、東京の在日オランダ大使館の後援による「阿蘭陀正月二百周年記念夕食会」に招待され、町長代理の佐々木進助役と木村悌郎教育長が出席する。長崎出島の頃の献立が、当時のままに再現される。
	4.11	オランダ大使ファン・デン・バーク夫妻が退職（8月退職）を告げに山田町を訪れる。
	4.28	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され出席する。
	8.24～30	ロイヤル・ハーグ・フットボールクラブを招請し、「日本・オランダ王国親善少年サッカー交流大会」を町民総合運動公園サッカー場で開催する。地元高校生らと交流試合を行うほか、町内の小・中学生にサッカーのレッスンを行う。夜は山田町の家庭にホームステイする。
	10. 9	黒澤孝町長、木村悌郎教育長、佐々木一男町議会議長が、オランダとの交流をさらに進めるためにオランダ王国を訪問する。ザイスト市役所とクリステリック・カレッジ・ザイスト校を表敬訪問し、山田町の中学生の受け入れをお願いする。
1996	2.3～12	第1次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、統導者2名の使節団一行がクリステリック・カレッジ・ザイスト校で行われるジャパン・ウイークに参加し、オランダの生徒と交流するために派遣される。一行はロイヤル・ハーグ・フットボールクラブや、オーストブルフ市等を表敬訪問する。
	2月	オランダ正月300年記念祭に招待され、佐々木進助役、木村悌郎教育長が出席（東京）。
	3.20～30	第1回山田町海外研修派遣事業が実施される。町民9名、事務局2名の研修団一行は、オランダの人々との交流促進のためにハーグ市、オーストブルフ市、ブレスケンス市等を訪問する。

年	月日	内　　容
1996	4.26	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され出席する。
	5.19	トン・コープマン氏によるアムステルダム・バロック・オーケストラ演奏会が、山田町中央公民館にて開催される。演奏会後にABOメンバーとの交流会が行われる。
	6月	山田町国際交流倶楽部が設立される。(会長・清水誠勝氏)
	8月	国際理解講座を開催する。北アイオア大学準教授レイニアー・H・ヘスリンク氏による「ヒューストン事件」と題された講演。
	8.17	アムステルダム市在住の日本人フルート奏者高橋真智子氏とアムステルダムオーケストラ・コンチェルトヘボウによる演奏会が、山田町で開催される。
	9.28～11.26	オランダ画家、シュールド・ベッカー氏が山田町に滞在し創作活動をする。滞在中に彼は山田町民を対象に絵画教室を開いたり、山田町で創作した最新の絵画の展示会などを開催する。
	10.19～21	オランダの有名な報道写真ジャーナリスト、アド・バン・シェイク氏がアジア関係の雑誌に掲載するレポートを書くため、ブレスケンス号事件についての取材のため来町する。
	11. 6	黒澤孝町長、木村悌郎教育長は、オランダ王国大使によって晩餐会に招待される。このパーティーがオランダと日本との関係400周年を祝う記念祭の幕開けである。そこでコック首相、ミーロ副首相と会う。
1997	1.6～16	第2次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、統導者3名の使節団一行がクリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒たちとの親善交流のため派遣され、オランダとの交流を促進する。生徒たちはザイスト市で4日間のホームステイと3日間の学校生活を経験する。その後、オーストブルフ市長の表敬訪問やオーストブルフ市にある学校の訪問などで交流を深める。
	2.26～3.1	クリステリック・カレッジ・ザイスト校の校長フレッド・スティーンスマ氏と教務主任ライニール・ヒース氏が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒と山田町の生徒との交流の促進と、黒澤孝町長を表敬訪問するために山田町を訪れる。山田町滞在中に町内の中学生や先生たちと親善交流をはかるため、山田中学校と豊間根中学校を訪問する。
	3. 2	日蘭関係400周年記念として、長崎県佐世保市のハウステンボスで、21世紀におけるオランダとのさらなる交流の促進のためのシンポジウムが開かれる。黒澤孝町長と木村悌郎教育長が招待され、黒澤町長がシンポジウムに出席する。シンポジウムには、オランダ大使、長崎県知事、外務省、日蘭交流に関係のある42市町村や民間団体等、多くの来賓が出席する。
	3.14～24	第2回山田町海外研修派遣事業が実施される。町民8名、事務局3名の研修団一行は、オランダの人々とのさらなる交流の促進のためハーグ市、オーストブルフ市、ブレスケンス市等を訪問する。
	4.25	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され出席する。
	6.21	山田町国際交流協会が設立される。(会長・清水誠勝氏)
	9.17	山田町商工会主催で国際交流セミナーが開催される。「日・蘭経済交流の展望」と題し、オランダ駐日公使モール氏が講演を行う。「日・蘭交易の歴史的背景」と題し、ライデン大学クレイン教授が講演を行う。
	10.21	山田町議会全員協議会において、ザイスト市に友好都市締結の申し入れをすることについて承認を得る。
	11.15～25	第3回山田町海外研修派遣事業が実施される。町民9名、事務局2名のほかに山田町商工会のオランダミッション団9名を含めて実施され、研修団一行はハーグ市、ザイスト市などを訪問する。ザイスト市では団長佐々木進助役からザイスト市長へ山田町長の親書を手渡し、友好都市締結を正式に申し入れる。

年	月日	内　　容
1998	1.5～15	第3次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、統導者2名の使節団一行が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためにオランダに派遣され、ザイスト市との交流を一層進める。生徒たちはザイスト市で4日間のホームステイと3日間の学校生活を体験する。その後ザイスト市を表敬訪問し、ルドロフ・G・ブックホーヴェン市長に面会する。
	3.1～31	鯨と海の科学館で「オランダ展」が開催される。山田町とオランダの交流の歴史をパネルで紹介する。そのほかオランダの12州旗の展示やオランダの民芸品の展示即売、オランダの野外楽器ストリートオルガンの演奏体験コーナーを設置し、大勢の入場者で賑わう。
	4.28	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され出席する。
	5月	家族旅行村に造成したチューリップ園に6万本の赤、白、黄、紫のチューリップが咲き、ゴールデンウイークの観光客や町民の目を楽しませる。在日オランダ大使館から贈られた球根も見事に咲きそろう。
	5月	山田町日蘭交流友の会が設立される。（会長・伊藤敏氏。）
	6.10～8.20	日蘭学会の依頼で、オランダ政府派遣留学生制度「日本研究プログラム：STIR」により、ライデン大学日本語学科のエレン・コリン・フィッサーさんを研修生として受け入れる。
	6.10	山田町教育委員会がレイニアー・H・ヘスリンク北アイオア大学準教授『オランダ人捕縛から探る近代史』（日本語訳）を発刊する。1643年6月10日に蘭船「ブレスケンス号」が初めて山田湾に入港した月日に合わせて発刊されたもの。
	6.12～21	西暦2000年の日蘭友好400周年記念を祝う先駆けとして、国際交流フェスティバル'98が実施される。諸行事にオランダから駐日オランダ大使夫妻、ザイスト市長夫妻、レイニアー・H・ヘスリンク準教授（北アイオア大学）、コニー・ヨングブルッドゥさん、エレス・クレメント館長（ブレスケンス海洋博物館）、日蘭学会のレメリンク理事のほか招待者が参加し、盛大に行われる。 12日・オランダの世界的な音楽家トン・コープマンが、中学校の吹奏楽部に演奏指導 13日・国際交流物産フェア（～21日） ・トン・コープマン指揮アムステルダム・バロック・オーケストラ公演 ・国際交流フェスティバル'98開幕パーティー 14日・国際文化講演会（講師：レイニアー・H・ヘスリンク北アイオア大学準教授） 21日・国際交流シンポジウム in やまだ
	6.15	山田町が友好親善都市の締結を目指しているオランダ王国・ザイスト市のブックホーヴェン市長と黒澤孝町長が会談する。両市町がさらに交流を推進し、西暦2000年に締結できるよう努力することを確認し合う。席上、ザイスト市長は黒澤町長のオランダ訪問を要請する。
	6.27	ハウステンボスで開催された在日オランダ王国大使館など主催の日蘭交流400周年記念事業「デ・リーフデ号ロッテルダム出港記念セレモニー」に黒澤町長が招待され、町長代理として佐々木進助役他1名が出席する。
	11.6～16	第4回山田町海外研修派遣事業が実施される。町民6名、事務局3名の研修団一行が、イギリス、ベルギー、オランダの3カ国を訪問する。オランダでは、ハーグ市、アムステルダム市、ザイスト市に滞在し、施設や市内の視察研修等を行い、オランダの人々と交流を深める。
1999	1.5～15	第4次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、統導者3名の使節団一行が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためにオランダに派遣され、生徒たちは4日間のホームステイと3日間の学校生活を体験する。ザイスト市役所を表敬訪問し、市長と面会する。

年	月日	内　　容
1999	3月	ザイスト市にあるクリステリック・カレッジのスティースマ校長から、親善訪問団を10月に山田町へ派遣する旨の手紙が届く。
	4.27	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され、木村悌郎教育長が出席した。
	5. 5	家族旅行村のチューリップが咲きそろい、初の試みとして「チューリップまつり」が開催される。在日オランダ大使館から昨秋寄贈になったチューリップの球根で作った日蘭国旗が、観光客の目を引く。
	5.24	山田町日蘭交流友の会が設立される。山田町海外研修事業の参加者、ジュニア大使の保護者ら会員80人でスタートする。山田町で行われる日蘭交流事業への協力やオランダからの来訪者の歓迎会を開催し、民間外交の一翼を担う。
	6. 1	「岩手山田旅情」の日本語とオランダ語を列記した楽譜が作製される。オランダ語訳は、ハーグ市在住のコニー・ヨングブルッドゥさんと平井美智子さん（豊間根出身）にご協力をいただく。歓迎会等で活用されていく。
	10.13 ～17	クリステリック・カレッジ・ザイスト校の友好訪問団11名（生徒８名、統導者３名）が来町する。滞在中には、中学校の授業に参加したり、各家庭で２日間のホームステイを体験したりする。最終日には日蘭交流友の会主催による歓迎会が盛大に行われ、オランダとの交流を一層深める。
	10.31	オランダ王国デン・ハーグ市で結成されたオーケストラ「ファン・ヴァセナール」の演奏会が山田町中央公民館にて開催される。演奏会後に、日蘭交流友の会などの主催による歓迎交流会が行われる。
	11.7～ 14	黒澤孝町長、佐々木良一議長、昆暉雄副議長、職員１名の他に第５回山田町海外研修派遣事業の研修団（町民９名、事務局２名）で構成された山田町・ザイスト市友好訪問団が、オランダに派遣される。日蘭交流400周年を迎える西暦2000年に本町が目指しているザイスト市との友好都市締結の事前協議が行われる。席上で黒澤孝町長とブックホーヴェン市長が正式締結に向けた友好盟約の宣言を取り交わし、2000年５月の友好都市締結の調印に大きく前進する。なお、12日までは山田町・ザイスト市友好訪問団のメンバーとして行動した海外研修団11名は、13日以降は別行動となり、オランダの後、ベルギー、イギリスを訪問し、引き続き施設等の視察研修を行い、17日に帰国する。
	11.26	在日オランダ大使館から寄贈になった400個の球根を、船越保育園の園児らが植付ける。この球根は西暦2000年の日蘭友好400周年記念に贈られたもので、2000年の春には日本国旗と400の文字をデザインしたチューリップの花が咲きそろう。
2000	1.10～ 20	第５次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生８名、統導者３名の使節団一行が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためにオランダに派遣され、生徒たちは４日間のホームステイと３日間の学校生活を体験する。ザイスト市役所を表敬訪問し、市長や教育長と面会する。
	4.24	黒澤孝町長、木村悌郎教育長が、日蘭交流400周年記念実行委員会及び在日オランダ大使館主催による日蘭交流400周年及びクイーンズ・デー2000の祝典に招待され出席する。この祝典にはウィレム・アレキサンダーオランダ王国皇太子殿下も出席する。
	5. 5	オランダとの友好のシンボルとして造園された船越家族旅行村のチューリップ園の開花に併せてフラワーフェア（チューリップまつり）が開催される。前年11月に在日オランダ大使館から寄贈になった球根も見事に咲きそろい、400をデザインした文字がくっきりと表れ、観光客の目を引く。

年	月日	内　　容
2000	5.13	日蘭交流400周年を記念し、山田町・ザイスト市友好都市締結調印式が行われる。ローベルト・ミルデルス在日オランダ公使の立会いのもと、黒澤孝町長とルドルフ・G・ブックホーヴェン市長が、友好関係を促進することに同意し、締結書に調印する。調印式後には記念レセプションが開催され、ザイスト市代表団を歓迎するとともに友好都市締結及び日蘭交流400周年を祝い、関係者との交流を深める。翌14日、ザイスト市代表団と町関係者がオランダ島に渡り、ザイスト市から山田町に贈られた「ザイストまでの方向と距離を示すプレート」を設置する。その後、役場において町幹部とザイスト市代表団との意見交換会が行われる。午後、山田町中央公民館でミュージック・シアター「出島の頃」山田公演を鑑賞する。夜、山田町日蘭交流友の会が主催した「日蘭交流の夕べ」に出席する。15日、ザイスト市代表団は岩手県庁の増田寛也知事を表敬訪問し、山田町とザイスト市の交流の推進に協力をお願いする。
	5.14	山田町中央公民館でミュージック・シアター「出島の頃」山田公演が開催される。ザイスト市との友好都市締結を祝うとともに日蘭交流の歴史を振り返り、オランダの歴史と文化を理解する良い機会となる。
	5.14	山田町日蘭交流友の会主催で「日蘭交流の夕べ」が開催され、ザイスト市代表団やミュージック・シアター「出島の頃」出演者を歓迎するとともに、友好都市締結及び日蘭交流400周年を祝い、交流を深める。
	7.23	山田版運河跳び：みんなでやっぺん大会が開催される。オランダに250年以上前から伝わるスポーツ「フィーエル・ヤッペン」を真似て山田版のルールで開催される。楽しみながらオランダの伝統的スポーツを体験し、異文化の理解を深める。 ※フィーエル・ヤッペン＝棒で運河を飛び越すオランダの伝統的な競技
	10.8～11.2	日本文化とオランダの文化の交流を木の魂を借りて表現しているオランダ人彫刻家「ヤン・B・ワウドストラ」氏が山田町に滞在し、創作活動をする。創作活動中には、オランダふれあい教室で小学生と交流を深めたり、オランダ理解講座で山田町日蘭交流友の会の会員らと交流を深めたりする。11月3日から5日まで町民芸術祭と併せて作品展示会を開催し、山田町で創作した4作品と持参した6作品を展示する。
	10.14	「国際音楽の日」記念実行委員会の主催によるトン・コープマン氏率いるアムステルダム・バロック・オーケストラ演奏会が、山田町中央公民館にて開催される。「国際音楽の日」及び日蘭交流400周年、友好都市締結を記念して開催されたものであり、山田町での同オーケストラの演奏会は3度目で、初のフルメンバーの演奏会となる。演奏会後には、ABOメンバーとの交流会を開催する。
	11.3～5	町民芸術祭と併せて、日蘭児童・生徒絵画展が開催される。ザイスト市からの絵画26点（クリステリック・カレッジの生徒作品）と山田町の絵画43点（平成12年度山田町児童・生徒図画コンクール入選作品）が展示される。展示会終了後には、これらの絵画はザイスト市に送られて展示され、芸術の分野での相互交流が図られる。
	11. 7	在日オランダ大使館から球根が山田北小学校に贈られる。1996年に397個の球根が山田町に贈られ、以降毎年1個ずつ増やされて贈られ、2000年の日蘭交流400周年記念には400個の球根が咲きそろうように贈られたもの。400周年記念事業は終了したが、在日オランダ大使館は、今後は小学校に対して球根を贈り続けることを決定し、今年度は山田北小学校に贈られる。
	11.27～12.7	第6回山田町海外研修派遣事業が実施される。町民9名、事務局2名の研修団一行が、オランダ、ベルギーの2カ国を訪問する。オランダでは、アムステルダム市、ハーグ市、マーストリヒト市、ザイスト市に滞在し、施設や市内の視察研修等を行ったほかオランダの人々と交流を深める。

年	月日	内　　容
2000	12. 1	山田中学校吹奏楽部海外公演派遣団が、オランダへ向けて出発する。3日にザイスト市のベルグユック教会で友好コンサートを行い、ザイスト市関係者、市民が鑑賞に訪れ、音楽を通じて交流を深める。5日はアムステルダム市の世界屈指のコンサートホール「コンセルトヘボウ」でジャパンナイトの1ステージとして公演する。観客を魅了するとともに、現地で高く評価される。観客からの大きな拍手を土産に7日帰国する。
	1.8～18	第6次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、統導者3名の使節団一行が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためにオランダ派遣され、生徒たちは4日間のホームステイと3日間の学校生活を体験する。ザイスト市役所を表敬訪問し、市長や教育委員と面会する。
	4.26	沼崎喜一町長が東京の在日オランダ大使館の主催によるクイーンズ・デーに招待され、町長代理で豊間根章一助役が出席する。
2001	5.18～26	山田町日蘭交流友の会主催のオランダ訪問団「日蘭友好の翼2001」が、オランダ、ベルギー、イギリスを訪問する。オランダでは、アムステルダム市、ザイスト市、ハーグ市などに滞在し、施設や市内の視察研修等を行ったほか、オランダの人々と交流を深める。特にザイスト市滞在中には、ザイスト市―山田町友好都市委員会の多大なる協力により、ザイスト市民の方々に日本食を提供するなど、民間レベルでの交流が図られる。
	7.22	山田町ビーチフェスティバルのイベントとして、第2回の山田版運河跳び：みんなでやっぺん大会が開催される。楽しみながらオランダの伝統的スポーツを体験し、異文化の理解を深める。
	8.3～6	山田町日蘭交流友の会主催でクリステリック・カレッジ・ザイスト校のフレデリーケ・アネマさんを山田町に招請する。アネマさんは、2年前にクリステリック・カレッジ・ザイスト校の派遣団員として山田町を訪問しており、2001年2月からはYFU国際交流財団が実施している交換留学事業で、大阪の清教学園中・高等学校に留学中であった。山田町滞在中にはウニ染め体験（ウニの殻を染料にした染物）、海水浴などで交流を深める。
	9.29	山田町・ザイスト市友好都市締結一周年記念として、国際交流フォーラムディスカッションが開催される。山田町国際交流協会と町内の各種団体らが実行委員会を組織して開催したもので、山田町とザイスト市そして日本とオランダ王国の交流を維持継続していくため、民間レベルでの今後の交流のあり方を探る。オランダからはフレッド・スティーンスマ氏が来訪し、夜には交流パーティーが開催され交流を深める。
	10. 1	在日オランダ大使館から球根が山田南小学校に贈られる。
2002	3.20	オランダ理解講座を開催。2001年5月にオランダを訪問した「日蘭友好の翼2001」のメンバーによる、ザイスト市でのお茶会・そばを持ち込んでの食文化交流の状況等について報告が行われる。
	4.25	沼崎喜一町長が東京の駐日オランダ大使館主催によるクイーンズ・デーに招待され、夫人とともに出席する。
	5.11	5月11日から13日まで、ザイスト市との友好都市締結2周年を記念して、オランダ交流展を町内の空き店舗を活用して開催する。町民にオランダに対する理解と関心を深めてもらうために、オランダ関係の写真やお土産品の展示等を行う。期間中会場には延べ180名の町民が訪れる。
	12.11	「オランダ講座Ⅱ」を開催。第6回海外派遣事業参加者によるオランダ・ベルギーでの研修内容を、ビデオ等を使って紹介報告。
2003	1.6～16	第8次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、山田高校生2名、統導者3名の使節団が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためオランダに派遣され、生徒たちは6日間ホームステイし、うち3日間の学校生活を体験する。ザイスト市役所を表敬訪問し、市長等と面会する。

年	月日	内　　容
2003	4.24	沼崎喜一町長が東京の駐日オランダ大使館主催によるクイーンズ・デーに招待され、町長代理として石山勝博収入役が出席する。
	10.5～11	10月5日から11日までオランダ週間を開催。オランダ政府観光局から仕入れたオランダのグッズなどを販売するほか、写真等を使って広くオランダを紹介する。期間中延べ320名の町民が観覧に訪れる。この行事のためにオランダから来日したコニー・ヨングブルッドウ夫妻の歓迎会が、5日に行われる。コニー・ヨングブルッドウ氏によるオランダ理解講座が、6日中央コミュニティセンターで行われ、30名の町民が参加する。
	10. 9	伊藤敏日蘭交流友の会会長を団長に9名とコニー・ヨングブルッドウ夫妻を含めた11名が駐日オランダ大使館を表敬訪問する。当日はヘグバート・F・ヤコブス大使と歓談し、今後の日蘭交流について話し合う。
2004	1.5～16	第9次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、山田高校生2名、統導者3名の使節団が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためオランダに派遣され、生徒たちは6日間ホームステイし、うち3日間の学校生活を体験する。ザイスト市役所を表敬訪問し、市長等と面会する。また、ロッテルダム日本人学校、在日本大使館などを訪問する。
	2.13～20	第8回山田町海外研修派遣事業が実施される。町民7名、事務局1名、通訳研修生1名の研修団一行がオランダを訪問。ザイスト市を中心に財団法人ホフライスとの交流を深めたほか、市庁舎等を表敬訪問する。その他はオランダの観光視察等を行う。
	7.14	オランダ・ザイスト市から財団法人ホフライスの役員であるインゲボルグ・ハルチェスさんが来日。歓迎会を開催する。インゲボルグさんは7月初めから約1カ月間日本に滞在し、その内の2週間を山田町でホームステイして過ごす。インゲボルグさんは山田の海外研修団のホストファミリーだったことから、宿泊を世話した町民宅等にお世話になる。
	10.4～11	10月4日から10日までオランダ週間を開催。友好都市ザイスト市から提供された障害者施設で作ったＡＤＯ玩具や、ザイスト市関連の写真等を使って展示したザイストウオッチングなどが町民の目を引く。期間中延べ400名の町民が観覧に訪れる。また、この週間のためにオランダから来日した財団法人ホフライスのフレッド・スティーンスマ会長、コニー・ヨングブルッドゥ氏の歓迎会が4日に行われる。スティーンスマ氏によるオランダ理解講座が6日中央公民館で行われる。ヨングブルッドゥ氏によるオランダ料理教室が7日に行われ、オランダの代表的なパンケーキなどが紹介される。
	10. 8	伊藤敏日蘭交流友の会会長他5名とフレッド・スティーンスマ、コニー・ヨングブルッドゥ氏を含めた7名が駐日オランダ大使館を表敬訪問する。当日はヤンヘイツマ公使と歓談。来年のオランダ週間への大使の参加を要請する。
2005	1.7～17	第10次ジュニア海外使節団派遣事業が実施される。中学生8名、山田高校生2名、統導者3名の使節団が、クリステリック・カレッジ・ザイスト校の生徒との国際交流のためオランダに派遣される。生徒たちは5日間ホームステイし、うち3日間の学校生活を体験する。ザイスト市役所を表敬訪問する。また、アムステルダム日本人学校、在日本大使館などを訪問する。

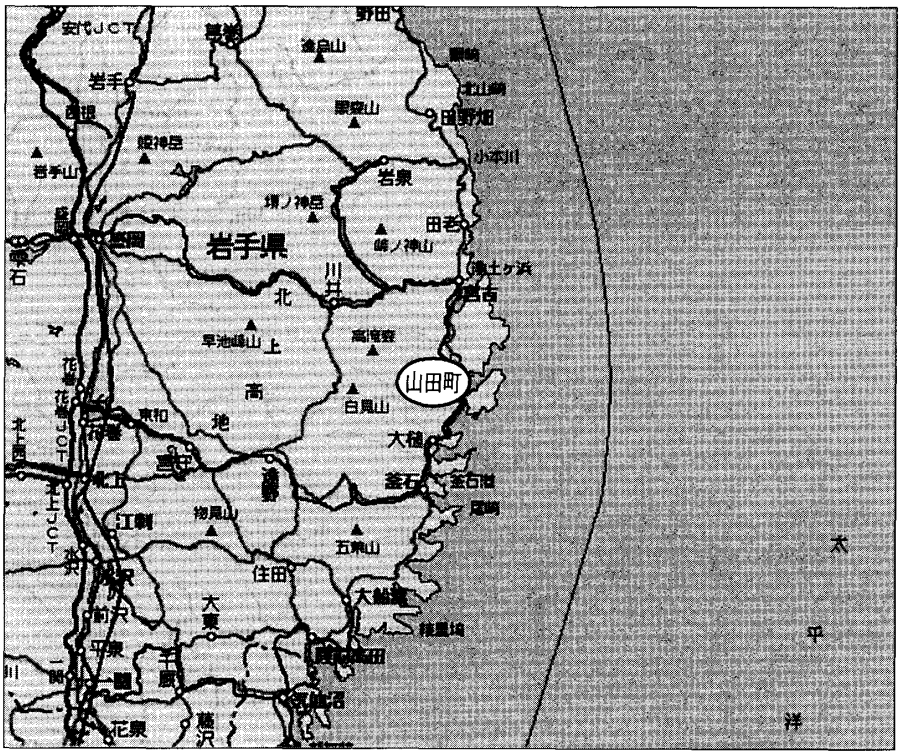
※　「海外研修派遣事業」は、第1回から第3回までは「一括研修派遣事業」の名称で実施。第4回から第6回までは「海外研修事業」の名称で実施。

※　「ジュニア海外使節団派遣事業」は、第1次から第6次までは「ジュニア大使友情使節団派遣事業」の名称で実施。

※　2001年度の第7次ジュニア海外使節団派遣事業は、派遣団は選出されたが、米国同時多発テロの影響で中止した。

（山田町から提供された資料をもとに作成。）

山田町の位置

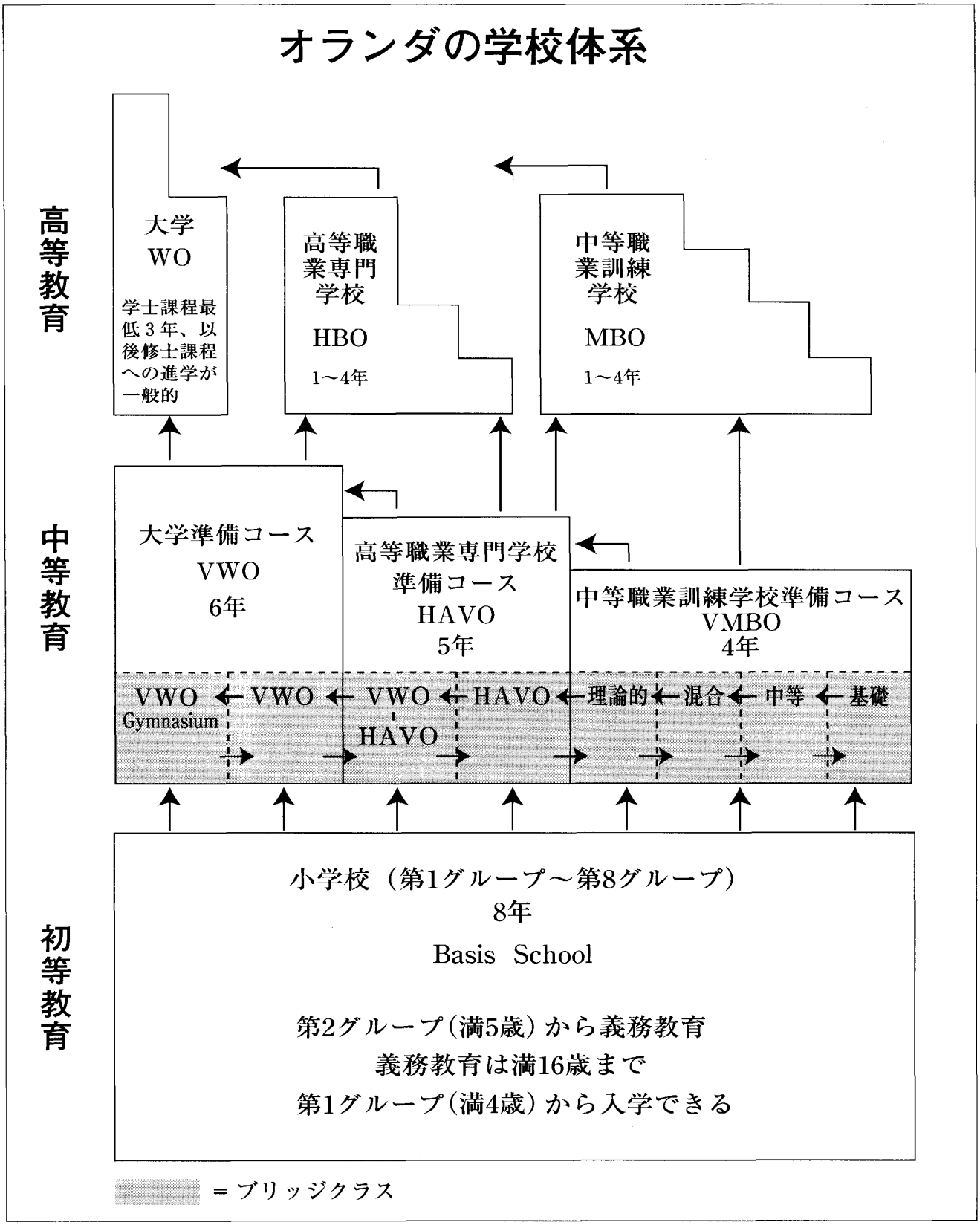


（出所：http://map.yahoo.co.jp）

ザイスト市の位置

（出所：ブルース・C・ドナルドソン、B.C.Donaldson（石川光庸・河崎靖訳）、『オランダ語誌――小さな国の大きな言語への旅――』1999年、現代書館、12頁より改作。）

オランダの教育システム



（出所：リヒテルズ直子、『オランダの教育』2004年、平凡社、127頁。）

（2005年6月20日原稿提出）
（2005年7月19日受理）

The Friendship City Relationship Between Yamada, Japan and Zeist, the Kingdom of the Netherlands

Tomoko SATO

Synopsis This monograph will treat of the friendship city relationship between the Town of Yamada, Iwate Prefecture, Japan, and the City of Zeist, Utrecht Province, the Netherlands. The relationship between Yamada facing the Pacific Ocean and the Netherlands dates back to the seventeenth century. In 1643, a Dutch ship named the Breskens, together with the Castricom, was sent to the Pacific Ocean with the purpose of examining whether the Gold and Silver Islands recounted by Marco Polo might lie further south than they had been conjectured. On May 19 of the same year, however, the two ships were overtaken by a terrible storm, and were separated off the Hachijo Island, south of Japan. The yacht Breskens alone continued the voyage, reaching the Bay of Yamada on the northeastern shore of the main island (Honshu) on June 10, 1643. The captain ordered some of his crew to go ashore for fresh water. Shortly after, the people of Yamada realized the ship and came on board for inspection, and had a fabulous evening with the Dutch sailors, indulging in alcoholic drink and music, though Japan had promulgated a national isolation policy in 1639. Here was a fortuitous encounter between Yamada and the Netherlands in the seventeenth century.

Later in the middle of 1960s, Yamada named one island in the bay the Dutch Island, and thought that the inaugural meeting with the Dutch people was historic and precious enough to establish a sister city relationship with a city, a home port of the Breskens. This idea, however, was not crystallized into a fact for a variety of reasons.

Approximately thirty years later, in 1993, Yamada Town held the three hundred fiftieth anniversary of the Breskens' arrival in the Yamada Bay. At the celebration, Yamada municipal officials expressed their fervent aspiration to have a sister city in Holland to Erik H. Roelfzema, author and advisor to the Dutch royal family as well. Roelfzema gave their eager desire serious consideration, and introduced them to Christelijk College Zeist, whose principal was his cousin. In 1996, Yamada sent a first delegation of eight junior high school students with two chaperons. This program has lasted over ten years after that.

On May 13, 2000, Mayors of Yamada and Zeist signed an agreement to enter into a bond of friendly relations with each other. The objects of the relationship were to strive for the exchange and cooperation between the two cities in the cultural field, to investigate and identify the opportunities and possibilities for the exchange and cooperation in other fields, and to promote lasting friendship between the two cities, as well as the nations of the Netherlands and Japan. The aims have been achieved through music, arts sports, and mainly educational exchanges.

Five years have passed since Yamada started a close relationship with Zeist. This October, a delegation of representatives of Zeist is supposed to visit Yamada to commemorate the fifth anniversary of their friendship city relationship. They will be in the second stage where the ties of mutual understanding will be strengthened, and where friendship between the citizens will be promoted.

Key words　Yamada, Zeist, friendship city relationship, student exchange program, the Breskens, Dutch Island, Dutch East India Company